

伝習館



東京同窓會會報

第23号 2023.1.1



「空」池末 満・画

卓球女子、全国の頂点に輝く

新制伝習館高校事はじめ その1

柳川徒然草（4） 清和文楽邑

70年前の伝習ユニホームと当時の野球

琴奨菊関 私の思い出アルバム

「さげもん祭り」にこと寄せて

昭和中頃の京町一丁目と月光荘

北原白秋先輩との出会い

「柳河風俗詩」から読み解く隆吉の青春

懐かしいふるさとの味4

伝習館卓球女子、快挙!

吉住聖香さん、シングルスで全国の頂点に



3月21日、伝習館東京同窓会幹事LINEに、全国高校選抜卓球大会の女子シングルスに伝習館2年生・吉住聖香さんの決勝進出の一報が入りました。その決勝が中継され、手に汗握る熱戦を目にすることが出来ました。吉住さんは千葉商大付属高の下山咲夢選手を相手に堂々たるプレーを展開。得意のバックハンド打ちが冴え、終始ゲームをリードしての優勝、全国高

校の頂点達成となりました。伝習館高は水泳部(昭和26年)、女子陸上競技部(昭和28年)が団体戦を制し、全国制覇を遂げていますが、その後個人での1位は聞いておりません。今回の優勝は約70年ぶり、個人では初の快挙となりました。夏のインターハイ予選では当然、マークされる存在となった吉住さんですが、福岡大会で全

第49回全国高等学校選抜卓球大会が3月18日(土)〜21日(火)東京都立体育館で開催され、吉住聖香(現3年・大木出身)が全国の頂点に立った。選抜大会は新学期を間近に控えた1、2年生による学校対抗の団体戦と、過去に選抜大会やインターハイ、全日本選手権大会などへの出場経験がない選手による男女シングルスが行われる大会。

初頂点
18日の開会式は感染対策のため観客席に着いたまま行われ、聖香は選手もなまらララクスして臨み、その後は朝日に向けた練習をおこなった。翌日の19日は予選リーグが行われた。全リゲ1位の選手のみが決勝トーナメントに進出できる。ゲームが進む毎に調子が上がった吉住は、2勝2分け1敗の決勝トーナメントへの進出を果たした。

20日の1回戦は、対戦したカワチを相手に相手に対し粘り強いゲーム運びで勝利した。続く2回戦では、攻守ともに好調な山本を相手に、吉住は逆転(京都府・京都成章)に快勝した。21日は、準決勝・決勝が行われた。ここまで安定したゲーム運びが光り、順調に勝ち上がってきた吉住であったが、準決勝の山本選手(金澤県・秋草学園)戦では大会初めて第1ゲームを先取される展開となった。第2ゲームも接戦となったが、ゲームの末取返した。勢いに乗った吉住は第3、4ゲームをもつて勝利を収めた。準決勝が終わってすぐに始まった決勝戦では、準決勝の激戦の疲れも見せず落ち着いたゲームの入りであった。下山咲夢(千葉県・千葉商大)系の強打が武器の下山咲夢(千葉県・千葉商大)に押される場面もあったが、粘り強く向かい合い、勝利・栄冠を勝ち取った。

女子シングルス
吉住 3-1 内田 陽也
吉住 3-0 桑原 協也
1回戦 トーナメント
吉住 3-0 野尻 瑞步
準決勝 吉住 3-0 吉井 京恵
準決勝 吉住 3-1 山本 瑞志
決勝 吉住 3-1 下山 咲夢

卓球一家
吉住は母親の影響で4歳からラケットを握っていた。父勝彦さんは、選手として団体と全日本選手権に出場経験があり、自宅には卓球の練習場を構えている。勝彦さんの指導のもと、小学生のころから九州大会で準優勝の実績があった。母直美さんは卓球選手としての経験を生かし、プレーの動画撮影や、栄養面のサポートなど欠かせない存在となっている。伝習館に入会してから、学校の練習だけでなく、勝彦さんの指導による練習も続けられており、体力的な成長も手を取り、遠征試合を重ねて実力を向上させている。

先着者大会
最終日の1日には、伝習館東京同窓会長の白谷政則氏(前21回会長・横浜市鶴見区住)が会場に駆けつけ、激励を受けた。ネットのニュースを見て、来場されたが、感染防止のため会場内での応援は出来なかった。後輩の活躍に興奮きみであった。おしいお菓子の差し入れも勝利の力となった。

令和5年度に200周年を迎えます

伝習館は文武両道を全力で応援します

国屈指の強豪・希望ヶ丘高勢(早田ひな等、名選手が輩出)に阻まれ、二冠の夢は潰えました。ともあれ、盛んとも聞いていない伝習館卓球部からまさかの全国一。文武両道とひと口に言いますが、簡単なことではありません。自分の水泳部時代のことを振り返ってみても、練習で疲れて帰れば、家での学習はおろそかになりがち。中間、期末テスト期間中は試験勉強専念で練習を控えざるを得ないこともあるでしょう。進学校でスポーツを続けることの難しさです。吉住さんは4歳から卓球を始め、家族で卓球を日課のように練習する卓球一家。国体、日本選手権出場の父親を相手に朝、晩と7時間のトレーニングをす

卓球少女・吉住聖香さんが全48校の頂点に輝く

伝習館おき5月号

(広報おおき)



表紙絵「空」高21 池末 満

第89回独立展出品作、200号。
筑後川支流の早春の白川情景。

・伝習館卓球女子、吉住聖香さん全国一の快挙！

23号 目次 1

東京同窓会本部だより

令和5年 年頭の挨拶・総会開催の告知・・・会長 白谷政則	2
・学年幹事会活動報告	3
東京同窓会決算報告書	3
賛助金ご協力状況報告	4
賛助金通信欄コメント	5

先輩・後輩より

・新制伝習館高校事はじめ その1	高4	渡邊 喜亮	6
・柳川徒然草(4) 清和文楽呂	高4	小野硯一郎	10
・70年前の伝習ユニフォームと当時の野球	高4	荒井健之輔	11
・琴奨菊関、私の思い出アルバム	高5	下河 秀行	14
・「さげもん祭り」にこと寄せて	高11	龍 勝	16
・昭和中頃の京町一丁目と月光荘、伝習館	高16	椛島 正司	17
・北原白秋先輩との出会い	高42	弥永 邦夫	19
・「思ひ出 柳河風俗詩」から読み解く隆吉の青春	高21	北島 正常	21
・懐かしいふるさとの味4	高4	荒井健之輔	23
・50代になっての東京と同窓会への想い	高41	下河 敏彦	26
【詩・俳句】手紙 夢の中	高14	井上 晴美	27
・俳句	高13	原田万紗子	27
◆編集後記 会報寄稿募集、広告募集、東京同窓会 Facebook など			28

伝美ギャラリー&トピックス

- ・師村さん、県美展で美術協会賞！
- ・高木節子さん写真＝ツインの揚羽ほか
- ・ミスタージャパンで佐藤さん大健闘
- ・勝国師、みやま市民センター柿落とし公演
- ・東京同窓会ゴルフ同好会コンペの報告



柳川探求
No.28

柳川で光り輝く人や、健力的なものがここを紹介し、

【上】卓球の個人戦で全国準覇を成し遂げた伝習館高校3年の吉住さん。高校の選手が卓球で日本一になるのは初めて【左上】練習では得意なバックハンドのさらなる強化に取り組んでいる【左下】3月28日、金子市長へ優勝を報告。「卓球で柳川を盛り上げてほしい」と金子市長から激励を受けた。

広報やながわ

伝習館高校の吉住さんが卓球日本一
父と共にさらなる高みを目指す
吉住 聖香さん (17歳)

ると聞いて強さの秘密が理解できました。父親という名コーチ、練習相手がいることは選手にとっては実に頼もしい存在です。一方で勉学も怠らない、精神力の強い持ち主だと思えます。

吉住さんは私と同郷の太木町出身と聞いて、改めて親近感を持ちました。雨、風の日も6〜7キロを自転車漕いで通学していることと思います。高校卒業後(大学進学)も卓球は続けられるでしょうが、大会で名前が出たら、また応援したいですね。

(会報編集部・北島正常)

東京同窓会本部より

令和5年 年頭挨拶

明けましておめでとうございます。同窓生の皆様も穏やかな新年をお迎えのことと存じます。いつも伝習館東京同窓会にご協力、ご理解いただき有難うございます。

伝習館東京同窓会
会長 白谷政則



東京同窓会では大勢で集まる全体的な活動を3年間自粛していましたが、今年は藩校伝習館が創立200年目を迎える記念の年なので是非とも総会を開きたく準備しています。コロナ以前は当番幹事(実行委員)の学年もスムーズに選出決定していましたが、今は話し合う場を設ける事さえままならぬ状態です。都内の地区センター(会議室)を借りるのにもコロナの波を避け予約し、定員の半分程で2回に分けて会議し、なお且つ1時間毎に換気と感染予防に気を付けて少しずつ話し合っています。学年幹事や常任幹事たちは色んな事態を想定し、どの様な総会にすればいいかを考えて進めていますので、東京同窓会の皆さん、今年はコロナ流行の波がピークにでもならない限り**総会決行**と思っても構いません。

この場で皆さんに具体的な内容をお知らせ出来ないのが残念ですが、講演会やアトラクション・郷土物産販売などやるのかやらないのか、また食事やアルコールもコロナの状況を踏まえて流動的になることをご了承願います。とにかく皆さんお会いしましょう!!

この3年間で母校では平塚館長から葉玉館長、尋木館長と交代されました。葉玉館長は伝習館初の女性館長で東京同窓会総会にお出でいただきたかったのですが2年の任期をもって退任されました。伝習館の卒業生なので柳川本部の同窓会顧問に就任されています。いずれお話をさせていただく機会もあるかと思えます。

賛助金協力をお願い

この会報を発行する費用など東京同窓会の行事は皆さんの賛助金により成り立っています。コロナが収束すれば総会や交流会なども始まり、同窓会も活発になると思います。

東京同窓会は会費制にせず、賛助金は任意ですが、誰かが払ってくれるだろうと皆が思ってしまうと、財政は立ちゆかなくなり、あと3~4年したら東京同窓会の資金は枯渇してしまいます。3年間賛助金未納者には会報送付は止める・紙面での発行は止めネット配信だけにする等の意見もありますが、避けるためにも偏に皆さんの善意のご協力をお願いいたします。

今年5月28日(日)、 伝習館東京同窓会総会を開催します！(会場=田町)

◆とき = 令和5年5月28日(日曜)

正午開催予定。内容はこれから検討します。

◆ところ = グランパーク カンファレンス

(港区芝浦3-4-1)

JR田町駅から徒歩5分、都営浅草線・三田線 三田駅7分



※開催決定の節は皆さまに案内はがきが行きます。会費、時間・場所などについては案内に記載されます。

学年幹事会の活動報告

東京同窓会の一年 (R3・11～R4・10)
伝習館関係

R3・10 / 11 会報22号最終調整
R3・12 / 11 (土) 学年幹事会 駒込
コロナ発生以降初めて開催

・ R4 東京同窓会開催の是非
・ 開催の場合の規模、形式について
・ コロナ再流行の場合について
R4・2 / 10 郵送、メール

・ 総会の中止
・ 12月欠席者にはコロナ禍での同窓会活動について報告
R4・5 / 28 (土) 学年幹事会 駒込

・ 三年間総会を開けなかった影響
・ ウイズコロナでの総会について
R4・7 / 28 (木) 有志のみ 田町

・ 会場の下見 / 調査 / 交渉
R4・10 / 1 (土) 学年幹事会 五反田
7月に下見した会場
について報告

・ 協議の上 5 / 28
(日) 開催で決定
学年幹事会はコロナの波を避け急に集まり会議しているのでLINEで呼びかけています。



柳川市関係
令和4年までの行事はありませんが今年があります。チラシ同封！

伝習館東京同窓会学年幹事名簿 令和5年1月現在

卒業年次	氏名	卒業年次	氏名	卒業年次	氏名
第2回 (名誉会長)	江崎正直	第18回	吉田シヅカ	第36回	指田初代 (藤木)
第4回	渡邊喜亮	同上	満生英二	同上	猿渡由季子 (渡邊)
同上	荒井健之輔	第19回	芹川季代子 (立花)	第37回 (常任幹事)	石橋泰光
第5回	岸 栄洋・洋子	同上	田中茂利	同上 (常任幹事)	志牟田美佐
第6回	石橋 修	第20回 (常任幹事)	高巢和登	同上	桑山 薫
同上	戸上軍治	第21回 (常任幹事)	西原正道	第38回 (常任幹事)	金子千恵美
第7回	原田 晃	同上 (会長)	白谷政則	第39回 (常任幹事)	高橋 徹
第8回	池田孝人	同上 (編集長)	北島正常	第40回	山田雅彦
同上	一色康子	第23回 (常任幹事)	樋口貴美子 (田上)	同上	藤田昌弘
第10回 (編集委員)	内山秀生	同上 (常任幹事)	高田健二	同上	千釜洋子
同上 (編集委員)	永倉素子 (跡部)	第24回 (常任幹事)	酒見和平	同上	石橋美和
第11回	永尾弘行	第25回	稗田克彦	第41回	古賀貴統
第12回	小野アケミ (岸川)	第27回 (常任幹事)	高橋圭介	同上	下河敏彦
第13回	田中利道	同上	松藤峯成	同上	鶴 由希子
同上	尾田義昭	第28回 (常任幹事)	吉開孝人	第42回	弥永邦夫
同上 (副会長)	原田万紗子 (立花)	第32回	甲斐田幸輝	第51回	本村泰輝
第14回	高木節子 (堤)	同上	一木亮之介	第54回	古賀智法
第15回	後藤民子	第33回	高椋佳夫	第55回	龍 幸弘
第16回 (副会長)	椛島正司	第34回	梅崎達也	第63回	佐藤公治
同上	水澤昭子 (田中)	第35回 (常任幹事)	池上英次	第65回	吉岡和政
第17回	浦川邦憲	同上	土井啓都	第66回	池田真由
同上	福山雅文	同上	大野美佐子 (山田)	第67回	松尾康平

会計報告 (2021/11/1 ~ 2022/10/31)

収入	郵貯	677,000	賛助金 147 件
	銀行	105,000	賛助金 12 件
	〃	0	受取利息
	当期収入	782,000	
支出	会報発行	942,029	会報 22 号発行費用一式 (発送費用含む)
	〃	25,104	編集委員会資料取り寄せ (原稿依頼) 送料
	学年幹事会	4,600	会議室使用料 (駒込文化創造館) 2 回
	〃	2,886	コピー代 (学年幹事会 3 回 / 郵送 4 回)
	広告費	40,000	伝習館大同窓会 (柳川) 広告費
	手数料	25,055	郵貯振替口座手数料
	〃	7,690	郵便振替通知手数料
〃	440	銀行振込手数料	
〃	5,020	郵貯振替用紙印字サービス料	
	印字サービス料	5,020	
	当期支出	1,052,824	
当期損益		△ 270,824	

前期繰越		1,502,138
当期損益		△ 270,824
次期繰越		1,231,314

令和3年～令和4年度 伝習館東京同窓会決算報告

【賛助金ご協力状況報告】

(令和3年11月1日～令和4年10月31日)

10月末日〆切としました。(氏名は←右から順)

回生	氏名
高5	中村裕彦
高5	武田八重子
高5	中村義行
高5	宮川政實
高6	池田勝嗣
高6	菊次信子
高6	石橋修
高8	樋口誠佑
高9	岩丸純芳
高10	江口武
高10	古賀ミユキ
高10	大村平人
高11	原尻満子
高11	久賀朝文
高11	秋永栄子
高11	佐薙輝代子
高11	城島孝雄
高11	興田広巳
高11	龍勝
高12	甲木宏明
高12	城戸ケイ子
高12	春口明美
高13	内山峯生
高14	宮原修
高14	松岡健次郎
高16	黒田タエ子
高16	高椋正臣
高17	龍敏彦
高17	中島功
高17	木原ユミ子
高18	緒方敬四郎
高18	細川正子
高18	松村由紀子
高18	吉田シヅカ
高19	森田達雄
高19	正岡喜則
高20	諸藤由美子
高20	井口ちづ子
高20	近藤敬介
高20	椀島豊子
高21	師村尚子
高21	藤木由美子
高23	坂本智臣
高24	田中知子
高26	野口佳延
高28	山本彰子
高32	咲村あかね
高35	山田広明
高35	石橋栄市
高42	弥永邦夫
高49	金見美佳
協賛0.5口	
高23	下田真知子
高33	中村孝子

(1口 2,000円)

回生	氏名
高18	十時理展
高18	満生英二
高19	野口昇
高20	東寛治
高20	藤丸昭徳
高20	田淵正
高20	岡賢二
高20	相見るり子
高21	西原正道
高21	坂井友実
高23	竹内幸代
高24	大橋久代
高27	高橋圭介
高27	江崎友大
高27	藤木雄二
高28	吉開孝人
高32	一木亮之介
高33	山田公德
高35	堤裕士
高44	清原万和
協賛2口	
女40	山田チテ
高1	高石満之
高4	今村啓爾
高10	永倉素子
高10	古賀雄次郎
高13	尾田義昭
高16	金子修
高20	児玉あけみ
高24	山田直美
高27	松藤峯成
高30	橋爪政男
協賛1.5口	
高3	宮崎八代子
高8	池田孝人
高12	尾田常昭
高12	加藤紘平
高13	田中利道
高13	進藤達実
高14	井上晴美
高16	水澤昭子
高18	井上頼子
高23	樋口貴美子
高32	柿野勇人
高32	甲斐田幸輝
協賛1口	
高2	田中豊子
高3	田島順次
高3	甲斐田義春
高3	臼井ヒロ工
高3	村井タカ子
高4	椀島啓之
高4	石橋安男
高5	原たか子
高5	野口幹彦
高5	松永悦子

回生	氏名
協賛25口	
高21	白谷政則
協賛10口	
高12	田中省三
高19	龍春雄
協賛5口	
高2	小野善睦
高4	渡邊喜亮
高4	小野硯一郎
高5	林サツキ
高5	岸栄洋
高6	戸上軍治
高6	川口鍵寿郎
高6	岡田哲也
高7	中村奨佑
高10	(故)江口修身
高10	内山秀生
高10	野田邦子
高11	樋口守
高13	岡部彰邦
高14	高木節子
高16	山口淳子
高16	椀島正司
高16	西田イサ子
高16	三小田雅美
高19	田中茂利
高20	安永保
高21	北島正常
高24	酒見和平
高27	友清寛
高30	下川久尚
高32	濱武久司
高35	大野美佐子
高35	池上英次
高37	江崎浩輔
協賛3.5口	
高41	下河敏彦
協賛3口	
中55	武藤徳一
高5	下河秀行
高8	永倉正彦
高8	大村泰生
高9	三小田晋二
高18	江口吉光
協賛2.5口	
高4	荒井健之輔
高5	緒方豊昌
高5	岸洋子
高5	安藤祥介
高5	江口政司
高8	入部一郎
高10	松藤俊正
高12	横山正和
高12	小野アケミ
高14	平野晴子
高15	後藤民子

伝習館東京同窓会 賛助金通信欄コメント

高16 梶島正司
小野善陸先輩の「泳ぎの履歴書」には感動しました。ギリギリ私達の時代まであった程なく忘れ去られるであろう柳河の原風景がありありと思ひ出されます。

高8 入部一郎
断捨離進まず馬齢を重ねています。今年こそ
と思いを新たにしています。

高19 森田達雄
枝先のムクの実を取ろうして堀に落ちた事を
思い出しながら、小野様の「泳ぎの履歴書」を
楽しく読ませていただきました。「関西だより」
も充実しなきゃ!!

高18 細川正子
我がふるさと柳川、懐かしいふるさとの味、
楽しく読みました。

高4 渡邊喜亮
斜庵先生大奮闘の会報発行22号でした。コロ
ナ未だ収束せず、今回は編集も特別のご苦労
だったと思います。

高4 今村啓爾
七コロナビ八起キの年、頑張りましょう!

高16 黒田タエ子
毎年賛助金協力の氏名欄を見て同級生の無事
を確認しています。

高6 戸上軍治
充実した内容の会報誌22号ありがとうございました。
毎回、年末年始には楽しみに拝読して
おります。北島編集長はじめ皆様には感謝です。

高49 金見美佳
会報ありがとうございます。皆様のご健康を
お祈りしております。

高28 山本彰子
コロナでなかなか帰省できない中、会報に元
気づけられております。

高23 下田真知子
「ひし」私もよく食べました。丸い桶(半切り)
にのっておばさんがとっていました。なつかし
い!! 斜庵先生伝柳川弁、これもじわつとくる!!
ありがとうございます。

高20 藤丸昭徳
会報を受け取り気持ち「柳川の方」を向い
ているうちに送金させてもらいました。

高5 松永悦子
いつもお送り頂き有難うございます。3月に
86歳になりますが今のところ元気に過ごして
おりボケ防止の為にピアノをヘッドフォンを付け
て弾いております。

高27 松藤峯成
2部送られてきました。いつも楽しみにして
読んでいます。

高10 (故) 江口修身
会報いつもありがとうございます。夫修
身は令和2年5月永眠しました。伝習館の二百
周年を祝し気持ちばかりお送りさせていただきます。
(妻)

高18 江口吉光
小野善陸先輩の「泳ぎの履歴書」興味深く読
ませてもらいました。自分の子供時代のことを
懐かしく思い出しました。ありがとうございます。
す!

高5 下河秀行
東京同窓会会報はこの20年毎年楽しみにして

いますが最近の傾向として、ある特定の人が多
数ページ寄稿されており編集が偏っていること
は大変残念です。もっと広く会員に開放しよ
うい会報づくりを心がけていただきたい。

高12 小野アケミ
小野善陸先輩の「泳ぎの履歴書」なつかしい
思い出と共に記憶がよみがえり、是非続きをお
願ひします。

高11 久賀朝文
毎日万歩を目指しております。

高10 古賀ミユキ
亡夫の同期小野善陸様より送って頂き楽しく
読ませて頂いています。会の益々のご発展をお
祈りいたします。

高16 西田イサ子
昼間は県立病院で働き、夜間定時制で学ばせ
てもらいました。伝習館会報を開くとそこに柳
川がある! なんと懐かしい!! いつもありがとうございます。
ございます!

高14 井上晴美
小野様はじめ皆様一文字一文字の力、加減の
妙、面白さは尽きません。遡って読めば、関連
した内容、共通点、新しい視点、がうかがえま
す。ご先輩の力、現在の力ありてこそです。

高33 中村孝子
いつも会報有難うございます。下記住所に引
越しました。

高18 吉田シヅカ
コロナあけ、大酒飲んでオシャレしたいわ。

高6 川口鍵寿郎
令和3年11月第6回卒業の同期会に出席しま
した。幹事の方々お逢いした皆様、そして出席
出来た自分自身に感謝! 感謝! 感謝! したいと思
います。

高13 進藤達実
プーチンの横暴に振り回される世界。政治
家・宗教家のレベルの低さに呆れるばかり。

高21 北島正常
水泳部大先輩の酒井清行さんが1月末逝かれ
ました。全国制覇に貢献し、現役で九大進学、
文武両道の鑑として敬愛の念やまない方でし
た。修学旅行生に熱く語りかけられた日の姿が
日に浮かびます。

高20 児玉あけみ
いつもお世話様です。古希を過ぎ70代を上手
く乗り切ろうとしています。

高10 野田邦子
お世話までございます。毎年楽しみにして
おります。

高21 師村尚子
小野様の「泳ぎの履歴書」、面白過ぎて笑い
泣き…。周りの人にも読んでもらっています。

高10 内山秀生
賛助金入れば、生きてる証し。ならずや

高14 高木 節子
9月、瀬高にみやま市総合市民センターが
オープン。人間国宝・杵屋勝国さん(瀬高生ま
れ)と一門による柿落とし公演が行われ、会場
で感激いたしました。高1の同級生、勝国さん
の健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

高21 白谷 政則
with コロナも3年の付き合いの中、皆様の
賛助金に励まされて同窓会活動を継続して
おります。今後ともご支援のほどよろしく願ひ致
します。

※東京同窓会の皆さん、この通信欄コメントに
近況などお寄せ下さい。

先輩・後輩より

新制伝習館高校事は じめ(その一)

高4 渡邊 喜亮

はじめに

戦後の学制改革により、男子校の中学伝習館と女子校の柳河高等女学校は廃止・統合され、新たに、男女共学の新制伝習館高等学校が設立されました。

併せて、県立高校受験に関する学区制が施行され、伝習館高校の区域には、柳城中学、矢留中学、両開中学、蒲池中学、三橋中学、大和中学、昭代中学、高田中学、木佐木中学、大溝中学、大莞中学などの新制中学が一斉に設立され、6・3・3の教育制度が発足することとなりました。昭和22年(1947年)から24年(1949年)にかけてのことです。

この新制度の実施に伴い、いままで在学していた中学伝習館と柳河高女の生徒たちは、一転、新制度の伝習館高校に編入、ここに、コペルニクスの転回ともいべき教育理念の逆転に遭遇し、激動の変革期を過ごすことになりました。伝習館高校一回卒から三回卒の先輩たちがこ

れに相当します。

その後、昭和25年(1950年)に、はじめで新入一期生として新制伝習館高校に入学したのが高四卒であり、従って高校第四回卒以降が入学から卒業までのいわば生粋の伝習館高校生となります。

当時から70年という思いもよらない年月を経て、いまや、われわれも90に垂んとする齢に至りました。新制伝習館高校の歴史と共に、それだけの馬齢を重ねてきたというわけです。

すべては往時茫々の感がありますが、ここに、思い起こすまま、「伝習館高校事始め」として、聊かの懐古録を書き残すことにしました。

蓮枯れて胡蝶の夢に漂ひぬ

入学して驚いた

入学してまず驚いたことがある。それは、瞠目し仰ぎ見る錚々たる上級生たちの存在であり、これに圧倒されたことであつた。

新制度の入学一期生は、学区の制約で、柳川と周辺の比較的狭い範囲から受験して入学した生徒たちである。これに對して、上の級の2年生、3年生は、久留米、大牟田、大川、八女はもとより、さらに遠い地方から、旧制度、難関の選抜試験を経て入学してきたので、全体の

レベルが高いのも当然と云えば当然であつた。

確か1年生の3学期に、当時、労働運動の理論的指導者として著名な学者であつた九州大学の向坂逸郎教授が講演に来校されたことがある。講演の冒頭「私は八女中学に入学したが、本当は伝習館に行きたかつた。伝習館の伝統と校風に憧憬の念を持ち続けていた」と云う趣旨の発言があつて少しばかり驚いたのであつた。教授はその後、旧制五高から東大に進み、ドイツ留学を果たされた碩学である。従つて、このことは、伝習館の歴史と伝統に対する先生特有のオマージュであつたと云うほかない。それほど伝習館は高いレベルの、独特の中学だつたと云うことである。

先輩たちは、旧制の教科で、既に3、4年もの高レベルの教育をうけてきた。また、同時に、その感受性豊かな時期に、戦後の社会体制の大変革に直面し、

強い個性と広い視野を持つにいたつたのだと思う。新規に設立されたばかりで、のうのうと新制中学から上がってきた入学一期生とは、まさに隔絶した存在だつたと云えよう。

そういえば、「どうも、こんど新制の1年生で入ってきた生徒たちは、おと

なしすぎて、ちよつと出来も悪かごたるばい」と云う教職員の嘆きもあつたやに聞き及んだことであつた。

このことは、反面、多くの同学年の諸君と同様、私自身も上級生たちに多大な影響を受け、成長していく契機ともなつた。

南北校舎と生徒たち

新制度による入学一期生は、生徒数500名足らず、全部で10クラスの編成であつた。全員女子の家庭科もあつたので、女子生徒に対して、男子生徒が大分少なかつた筈である。このうち、1、4組が旧伝習館の北校舎に、5、10組が旧柳河高女の南校舎に配属。このほか、交流はなかつたが、定時制(夜間)の生徒も在籍していた。現在、全日制のみで、定員200名と云うことなので大した違いである。

この当時の北校舎は、現在の伝習館高



新制伝習館高校北校舎



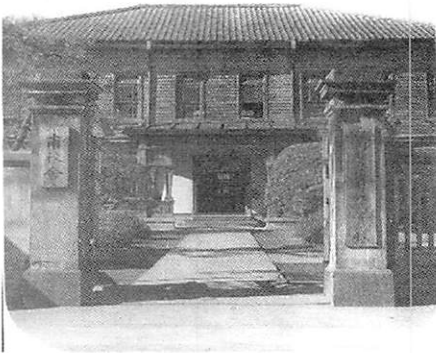
同玄関

校として存続、南校舎は、昭和38年（1963年）北校舎に併合され廃校、その跡は柳川市役所となっている。

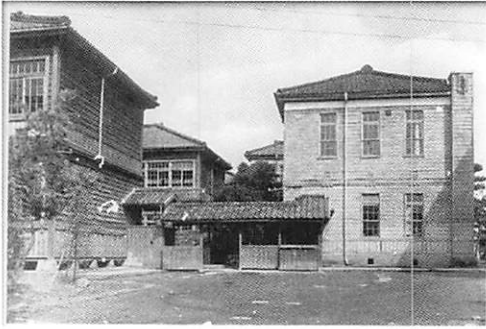
校舎は北校舎、南校舎、共に歴史の重みと風格を備えた立派な建物であったが、いまや、残る写真で偲ぶことしかできない。

何しろ、北校舎は、藩校以来130年の歴史を有し、数々の名士が輩出した伝統校の伝習館である。総じて、男子校らしい質実堅固、歴史を感じる建物であり、特に、正面本館は二階建ての堂々たる建築物であった。ただ、本館の左右両端から教室が奥の方に長く二棟のびているだけのごく平凡な配置で、また、野球、陸上などのグラウンド、テニスコートやプールあるいは体育館など、いずれも他の高校と大した違いはなかったであろう。

これに対し、南校舎は、規模はかなり



新制伝習館高校
南校舎門（旧柳河高女）



南側から望む南校舎

小さいとはいえず、県内有数の柳河高女である。古い建物ながら、長期に亘る丹精のお蔭で、女子の学園らしく、きわめて優雅な佇まいを保ち、また伝統の風格を備えていた。入口正面に本館があり、その奥の方に向かい合って講堂があった。一般教室の棟は本館の左右に独立して建てられ、さらにその右の別棟に、割烹教室、洗濯教室、作法室、美術教室、少し離れて音楽教室などが配されていた。中庭の炊事や用務員の独立棟などの外、以前は、幾棟もの独立の建物があったという。その間を渡り廊下が何本もつながり、しかも2階にも渡り廊下のある真に面白い設計であった。大きな池には睡蓮が植えられ、隅々には花壇が設えられ、全体として、女性の学び舎らしい風情をとどめていた。新制高校のわれわれにもまことに想い出のある校舎だったが、ましてや高女卒の皆さんにおかれては、懐旧の念如何ばかりであったかと思われ

る。

もともと、男子校であり、片や女子校である両校の建物や設備に違いがあったのは当然だが、急な改修であったため、不備な点も多々あった。

先年鬼籍に入ってしまったが、中村信人君の書いた面白い一文がある。同君は、国語担当の教諭

として伝習館に奉職していたので、ご存じのかたも多いと思う。

「…南校舎と云うのは、旧柳河高女の校舎であったから、運動場にはクロバーが緑のカーペットよろしく敷き詰められ、何となく、柔らかな華やいだ雰囲気があったのだが、私たち男子にとって、何とも不満でならないことが一つあった。それは、便所である。世は男女平等を謳歌しているというのに、ここでは、男子用の便所は、文字通りの付け足しで、急遽つくられたバラックの汚くて小さな便所であった。あまりに狭いので、休み時間ごとに、ラッシュアワーが出現した。恐らく、中学伝習館の校舎であった北校舎では、この反対の現象が、休み時間ごとに見られたのであろう：」

この例からも、入学当初の教育環境の一端を窺い知ることができよう。

入学し、教室で顔をあわせてみると、出身中学、住む町村、地域あるいは家庭環境などによって、言葉、気質、それに服装などもバラバラで差があることに気が付いてきた。戦後、まだ復興もままならず、人の往来もさほど頻繁ではなかった頃である。

同じく中村君の述懐である。入学早々撮影したクラスの写真を眺めながら、「…先生を真ん中に、男子30名、女子23名の生徒が写っている。この写真に、なんとなく痛々しい感じを受けるのは、校舎の痛み方もさることながら生徒の服装が、男女を問わず、マチマチなことによるようだ。学生服あり、軍服あり、シャツあり、セーラー服あり、詰襟あり、襟

付きあり、黒色、カーキ色、靴、下駄、裸足…。とにかく、ひとりとして同じなりをしている者は見当たらない：」

と云うような時代であった。

次に、これも入学して間もないころ、映画研究部（映研部）の何の会合？であったか、二年生の責任者Rさんがやってきて、数人の参加者を見まわし「おい、Kさん（女生徒）がいないけどどうした！」その同じクラスの某君「ソリガ、ナンチデンイワンナ、ハツテカシャッタケンノー、ドゲンモカンモ、デケンヤッタモン…モウシヨシナカタン」というような返事だったと思う。いくら所謂「在」（いなか）からの通学者であったとしても、学校でここまで亜流柳川弁をしやべらなくてもよかったような気がする。これには、日頃柳川弁に慣れ親しんでいる者としても、聊か、辟易した記憶がある。

また、その頃の教場の雰囲気についてはこんな事もあったようである。

「当時のテスト用紙は、粗雑で表面はツルツル、裏面はザラザラ。裏面の方が鉛筆の抵抗で、書きやすかったたので、裏に書いていたら、ある女先生に『あなたは共産党なの？』と云われて吃驚した。ちょっと他と違うことをしたら、こんな風に見られる時代だった：」

これは女性クラスの一員だった人の記述であるが、高女時代を引き継いだ一面もまだ伝習館には残っていた。

ここで、少しばかり補足しておかなければならないことがある。

前に、新学制移行当時の県立高校の学区について述べたが、当時は伝習館一校のみの学区で他に選択の余地はなかった。しかし現在は、伝習館の属する学区が、柳川市はもとより、大牟田市、大川市、みやま市、三潞郡、久留米市の一部へと大きく拡大された。従って、この学区には、伝習館高校のほか、大牟田北高校、ありあけ新世高校、三池高校、三池工業高校、山門高校、大川樟風高校、三潞高校、と県立校だけで8校も含まれることになり、選択の幅が広がった。

この中で、伝習館だけが平成18年に、福岡県の県立高校約100校のうち8校が選定されたスーパーハイスクールの指定を受け、重点校となった。これは、数年間の制度ではあったが、学区内8校のなか、伝習館が、現在までトップ校の地位を守り続ける根拠となったと思われる。

なお、ありあけ新世高校は、大牟田南高校、大牟田商業高校、三池農業高校、3校の合併により、また大川樟風高校は、大川高校と大川工業高校の合併により設立された高校である。

通学は青い山脈

入学当初、生徒の通学は、概ね徒歩か自転車であった。バスもあまりなく、遠くて、難儀した生徒も多かったと思われる。

校舎から比較的近い、城内村、柳河町の各地区は無論、周辺の、昭代、矢留、宮永、江曲、藤吉、矢カ部などのあたりだと、通学にさしたる問題もないが、少

し離れると、雨、風、暑さ寒さで大変だった。何しろ、通学路に舗装がほとんどない時代である。

しかし、それはそれで楽しいこともあったようで…。横浜詩人協会の会長などいまだ活躍中の富永たか子さんの話を紹介する。

「…通常は、大和村から自転車で通学していたが、ときには、徒歩通学になることがあった。遠い道を歩いていると、中途で、いい具合、男子生徒に出合い、すぐ自転車に乗せてもらえた。それがホントに嬉しくて楽しかった！」

このような思い出はほかにもあった筈で、伝習館の「青い山脈」はしばしば見かける風景だったに違いない。

そのほか、学区外からのいわゆる越境入学者を含め、汽車、電車に乗って通学する生徒たちは、国鉄佐賀線あるいは西鉄電車を利用していった。

今は廃止されたが、佐賀線には、ガソリンカーと呼ばれた短い車両が瀬高と佐賀の間をゆっくり走っていた。佐賀線の筑後柳河駅は、伝習館から出た道路を北上した塩川（沖ノ端川）に架かる出の橋（いでんはし）からだいたい先の北方にあった。駅の小さな待合室の売店には、われわれが生まれた頃の昭和9年製の掛け時計が無言で時を刻んでいた。

なにしろ、典型的な田舎町のことで、街並みも人心も至極のんびりした頃である。西鉄柳河駅で電車に乗ろうとして、急ぎ改札から走って「待ってハイヨー」と叫ぶと、ナント車掌は親切にも、合図の旗を降ろさずに、発車を待ってく



国鉄佐賀線の筑後柳河駅

れた時代であった。ホームのすぐそばに改札口が有った頃、昔の情景である。

西鉄柳川駅についてはちよつと書いておきたいことがある。もう何十年前も前のことになるが、帰省し、西鉄特急電車にのるたびに、柳川駅の近くになると車内放送で「次はヤナアガワー…」と、やたらナアにアクセントをつけて放送するのである。これが、どうも気になって仕方がない。「柳川ではだれもそんな発音はしない…ただ、ヤナガワと無アクセントである。地元で発音するようにヤナガワと訂正してもらいたい、よそから来た人が間違つて覚える」旨、帰省の都度駅長に申し入れ、西鉄本社にも電話したりした。ようやく数年後にあの違和感のある放送は改められた。こればかりはわが功績なりと内心自賛していたのだが…柳川の住人達は、気ニナランジャッタヤロ



旧西鉄柳川駅

カ？ それとも、そんなお節介はセンバイ…ということだったのか？

伝習館入学の3年前、6・3・3制の発足に伴い初めて新制中学に入学したのも高四卒の年代である。それがまた驚くべき教育環境だったことを思い出す。私が入学した柳城中学を例にとると、先ず校舎がない。そこで、暫定的に、伝習館の北校舎と南校舎の一角を借りて、急造のバラック教室ができたが、凡そ学舎とよべるものではなかった。

各教室も、粗末な板で仕切られているだけ、しかも上半分空けたままのため、隣のクラスの声が聞こえ過ぎて、てんで授業どころではない有様。特に隣が音楽の時間するときなどは、もう完全にお手上げの状態で、自習するほかないのである。

机はなし、何人掛けか忘れたが、ベンチのような長い椅子に座り、自宅から板切れを持参して机代わりに膝に乗せて授業を受けた。

今の若い卒業生たちにはおそらく想像もできない時代であった。

また、急造の中学のため、教える側も、多くは方々の小学校などからの寄せ集めで、全体の教員のレベルは生徒から見ても少々問題のある状況ではあった。

ただ、個々の教師には、例えば、満州からの引揚者で、東京女子高等師範（お茶の水女子大）出身の、本来なら、高校で教職に就くべき筈の日先生や、ほかに何人かのユニークな先生がいて、授業時間が楽しいこともあった。

伝習館での間借りの教室も、入学当初のことで、翌年には、現在の地に校舎が建てられ、何とか中学生らしい学校生活を始めることになる。

この劣悪とも云える教育環境から始まった中学時代であったが、今度は、1年が10年にも相当する密度の高い疾風怒涛の高校時代が待ちうけていた。

新入生歓迎会と部活動

伝習館高校に入学して、まず新入生歓迎会という驚愕、驚嘆の出来事に出合うことになった。その頃、伝習館では、4名の総務が選挙で選ばれ生徒会を運営していたが、歓迎の辞を述べたのは前年一年生の総務だった廣松渉さんであった。

まず、戦後社会の荒廃、朝鮮戦争の諸問題から始まり、主体性なき我が国の政治、経済の状況を嘆き、高校の生徒と雖

も現状打破、ひいては社会変革の意識をもたねばならないと説き、最後に「…かかる意味に於いて、諸君はひとりひとりが主体性を以て断固行動しなければならぬのである」と格調高い言葉で結んだのである。

これには、今まで経験したことの無い衝撃を受け、ホントに圧倒されてしまった。まさに、アリストテレスの云う「エトス（人格）」「ロゴス（論理）」「パトス（情念）」の三拍子に「メタファー（隠喩）」の妙を加えた名演説であった。

実に、若干十六七歳にしてこの才智である。

「あげんか演説は聞いたことなか」「すごか人のおるなあ」と皆、驚嘆し、己（おのれ）との余りの格差に溜息をついたことであった。

この廣松先輩こそが、GHQ（連合軍総司令部）への抗議ビラを撒いた廉で伝習館を退学となり、その後東大入学を果たし、さらに大学院を経て、東大で哲学の教授として盛名を馳せたあの廣松さんであった。

新入生歓迎会の後、何か行動しよう、何か新しいことに挑戦しようと言う熱意がふつふつと湧いてきたのである。

新入生たちの関心は、当然、正規の教育課程による授業に向かい、新しい学科の世界に触れられる、という新鮮な期待に満ちていた。片や、もっと自主性、自発性を発揮できる「部活動」にも向かうのは、また自然の成り行きである。

当時の「部」を列挙すると、文化部には、物理部、化学部、生物部、数学部の

ような理系から新聞部、図書部、文芸部、語学部、映画研究部、音楽部、声楽部、書道部、茶道部、家庭部などの文系が一応は揃っていた。もっと後になると、物理部の下部に、自動車部なるもぐりの部までできたことがある。

新聞部は、昭和26年1月、初めて、伝習館新聞を発行。図書部も2月に、県図書館コンクール2位に入選するなどの活躍を見せていた。映研部も当時の欧米名画を中心にたびたび鑑賞会を開き、またその合評会で親睦を深めたり、積極的に活躍していた。また、文芸部は、当時の部員の記憶によれば、白秋研究のため、熊本県の高松から、わざわざ伝習館を志望して転任された久保節男先生が復活されたという。先生は、戦前、大東文化学院（大東文化大学）在学中に白秋主宰の「多摩」に入会され、白秋の死、その廃刊後も、白秋に私淑、白秋研究に生涯を捧げられた。その成果は二冊の研究書として上梓されている。文芸部では、白秋の詩歌に親しむと同時に短歌の指導を受け、先に述べた詩人富永たか子さんと高校教諭の傍ら、久保先生の収集資料を含め、長年白秋関連資料の整理保存に尽力してきた与田邦彦君などが育って行った。

運動部の方は、陸上競技部、野球部、水泳部、排球部（バレーボール）、庭球部（テニス）、卓球部、体操部、籠球部（バスケットボール）などがあった。運動部の活躍については後述する。

かなりの新入生がいずれかの部に所属したと思うが、いくつか掛け持ちの部活

動をしていた生徒も多く、たとえば私の場合、物理部、数学部、映画研究部に所属していた。しかし、数学部は名ばかりでほとんど休眠状態であった。

然し、多くの部では、上級生たちから、それぞれ熱烈歓迎と指導を受け、感激を新たにすることになった。

卒業してからも続く連帯と友情の原点である。

それは、一年上の学年が、旧制中学以来、万年下級生としての立場を嘆き続け、初めて下級生を得た喜びと、その反面、新制中学3年間、上級生を持たず、高校入学で初めて上級生に出会うことになったわれわれの喜びとが、引力の如く引き合った結果でもあった。

中学時代、上級生がいないことを特に意識することなく過ごしてきたが、高校入学と共に、その真の意味を知ることになったのである。（次号へ続く）

『追記』 本稿（その一）および後の（その二）をまとめるにあたって

は、執筆当時の葉玉千賀子校長先生から、新制高校発足当時の南北校舎の状況やその前後の伝習館の主要な動静、運動部の活躍、学区制の現況などに付き資料を頂戴いたしました。さらには、貴重なアドバイスを頂いたことに衷心より感謝し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

柳川徒然草(その4)

清和文楽邑
高4 小野硯一郎

(平成二十年 記)

四月半ばに、伝習館同期の有志十人で熊本県南部と、隣接する宮崎県北部の高千穂方面に一泊旅行を行った。

この会は新制高校四期在柳川の気の合った十二人で、毎月一回例会を持ち各月当番が卓話を行う。題材ややり方は当番任せ、話が面白かるうが、面白くなかるうが、また自分には興味が無くても努めて関心を持って聞く。話途中での批判は禁止、当番の話が終わってから、異論なり賛成なり、尻馬に乗るなり、成るべくその話題に関連する雑談に花を咲かせて、土曜日の午後を過ごすこと云々次第である。

こうして発足以来今月で満八年を迎え、全九十六回を数える。

そして年に一回、一泊の研修(?)旅行を行う。これも単なる観光ではなくそれなりのテーマを以て行く事になっている。昨年は熊本県玉名地方の漱石の「草枕の里」を訪ねた。

今回は、先ず熊本県南の山都町(旧(矢部村)で江戸末期一八五〇年代に築かれた導水設備である「通潤橋」を見学して感銘し、続いて近くの清和文楽邑で公演中の「壺坂靈験記」を鑑賞した。その後、高千穂の国見ヶ丘や高千穂神社、

天の岩戸神社、天の安河原等を見て天孫降臨の神話の世界に浸り、南阿蘇を回って帰った。

今回のメインテーマは文楽鑑賞である。文楽は九州の人には縁が薄い。私は現役時代の最後の十年を大阪で過ごして、所謂上方文化や古典芸能に触れる機会が多かった。中でも文楽は国立文楽劇場があつて、常時公演されているので、何時でも好きな演目を選んで見ることが出来た。

文楽、所謂人形浄瑠璃も、歌舞伎と同じく、ある程度の予備知識があつた方が理解し易くまた見るにも要領がある。劇場ではその時の演目の台本(床本)を買って見ながら大夫さんの語りを聞けば良く分かる。素人が大夫さんの語りを聞いただけでは、まず半分も分からないだろう。

今回の同行十人の中では、私と他の一人以外、文楽は初めてであつた。私は大阪時代に買っていた今回の演目「壺坂靈験記」の床本を持っていたので、コピーして事前に皆に配っておいた。皆からは「お陰で良く分かった」と喜んでもらった。

今回の語りには出てこなかったが、い演目では段の代わり目で大夫が交代する。その時のつなぎ方が浄瑠璃独特で面白い。

例えば、通し狂言「仮名手本忠臣蔵」の例を見ると、
・「山崎街道出会いの段」から「二つ玉の段」への移りは「さらば」と方へ

立ち別れてぞ(ここで大夫は交代、語りは途切れ、次の大夫は)「急ぎ行く」と繋ぐ。

また、この段から次の「身売りの段」へは今迄の大夫は「飛ぶがごとく」で交代、次の大夫は「急ぎける」と繋ぐと云つた具合である。このやり方は専門的には何と云うか知らないが、要は物語の連続性を表すのであろう。従つて話の繋ぎ目が一段落する場面ではこんな繋ぎ方はしない。

更に歌舞伎の台詞にもよくあるが、文楽には独特の「掛詞」がよく出てくる。これなども床本を見ながら聞かないとなかなか分からない。

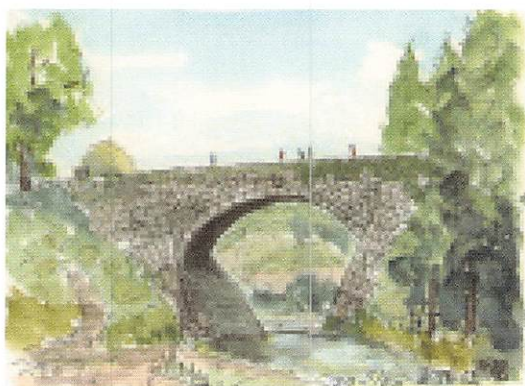
今回の「壺坂靈験記」の出だしにも
「並木松、濃茶の煙立て障子」や、
次の「沢市内より山の段」の初めの部分
「夢が浮世か浮世の夢か、夢てうりに住みながら、住めば住むなる世の中に良しあし曳きの大和路や」これは「よしあし」と「足引きの山(大和)」を掛けたものであろう。この様な表現は「雅」と云うか、「駄洒落」と云うか、気を付けて聞けば大変面白い。

私も文楽や歌舞伎をよく勉強した訳ではないので、この程度の知識しか持ち合わせていないが、それでも気を付けて聞いていると何となく、当時の文学の深さと云うか、日本語の奥深さと面白さが感じられる。

今回の旅行で、同行の皆が「文楽は面白い」と言ってくれて嬉しかった。ただ、九州ではやっとここ数年前から一応

毎年十一月か十二月に博多座で二三日公演される様になつたので、その機会に見るしかないが、その意味では「清和文楽邑」は貴重な存在である。
地元の人たちの大変な努力に支えられているが、観客ももっと多くなり文化遺産として、継続発展することを願うものである。

(追記:この懇話会は高四の同級生で行っているもので、平成十三年から平成二十八年に私が柳川を去る時まで十六年間続き、その後も在柳の会員で続けられているが、コロナ禍で滞りがちと聞いている。令和四年記)



通潤橋 スケッチ・硯

70年前の野球ユニフォーム と当時の野球

高4 荒井健之輔

2021年に米寿を迎えた。少し身辺の整理をしていたら、古着の箱の中から古い野球のユニフォームが出てきた。胸に「DENSHU」の文字が縫い付けられている。

なんと、70年前私が伝習館の野球部にいた頃のユニフォームである。そしていろいろと思い出が蘇ってきた。



昭和26年当時の「DENSHU」
ユニフォームが出現

昭和25年、私は伝習館に入学するとすぐに野球部に入った。当時の伝習館野球部は福岡県下の強豪で常に優勝候補に挙げられていた。目標は当然全国大会出場、則ち甲子園であった。

伝習館入学前後と伝習館野球部

私は中学（柳城中学校）でも野球をやっていた。中3の秋には新チームが編成される。3年生はOBで練習をやるのみである。そこで僚友の高口学等と伝習館の野球部の練習に参加させて貰った。当然入学の積もりだった。当時の監督は大橋さんといった。実業団の門鉄で内野手として鳴らした人で怖そうな人だった。細めのノックバットを手にして、よく怒鳴っていた。時々ノックバットで選手の尻や頭をコツンとやる。打撃の指導では、実際に打ってみせていた。「アウトコースに投げる」と言っていて、来たボールをライト前に打つ。「次は真ん中だ」と言っていて、センター前にはじき返す。「インコーナーだ」と言っていて、レフト前にヒットを打つ。「打つポイントが大事だ」と言っていて指導をしていた。中学は軟式でゴムボールだが、硬式は革のボールで固い。キャッチボールをしても掌にずしりとくる。掌が赤く腫れていく。体に当たれば痛い、すごく痛い。頭に当たれば命に関わる。当時はヘルメットなど無かった。打球音が違う、カーンという音が気持ちいい。

我々の少し先輩に山田善作という九州の中学野球界では剛速球でその名を知られた投手がおられた。戦後復活した全国中等学校野球選手権大会の県予選で、伝習館は決勝まで進んで小倉中学と対戦した。小倉も福島という好投手を擁していた。善作さんの好投空しく伝習館は1対0で惜敗、甲子園には届かなかった。そ

の年に小倉中学は全国制覇を成し遂げたのだった。そして更にその翌年、全国高等学校野球選手権大会と名前の変わった大会でも小倉高校は優勝し、再び日本一に輝き連覇を遂げたのであった。福島投手は全試合を完封するという輝かしい成績であった。

山田善作さんはその後八幡製鉄の野球部で活躍されたが、時々母校の練習に顔を出された。私が1年の頃来られたときに「荒井、俺の球を受けてみる」と言われてキャッチボールをしたことがあった。「一寸座ってみろ」と言われて私はミットを持って座った。球の速いこと、重いこと、叩りを立てて球が来る、ずしりと手に響く、痛い。必死になって受けたが怖かった。

伝習館に入学した頃の 野球界の状況

昭和25年伝習館に入学して、晴れて野球部の一員となった。監督は大橋さんから替わっていて、前川さんだった。都市対抗で実業団の西鉄が優勝した時の、シートをやっていた人だった。大橋さんは隣の柳川商業の監督になって移っておられた。

当時柳川商業は投手が権藤（後大洋ホエールズから阪神タイガース）、キャッチャー岩本（後専修大学）のバッテリーでなかなか強かった。岩本は大橋さんの家に住み込んでいて、毎日練習が終わると私の家の前を1升瓶を下げて、大橋さんの晩酌の酒を買いに往復していた。その頃実業団野球は全盛であった。そ

して都市対抗野球が人気だった。六大学野球も人気があった。勿論、戦後復活したプロ野球は大人気で赤バットの川上哲治、青バットの天下弘、黒バットの青田昇などが人気選手だった。出征していた野球の選手達が復員して、プロ野球、実業団、大学野球に戻ってきて活躍し、娯楽に飢えていた国民にとって野球は一大ブームになっていた。雑誌も「野球界」、「ベースボールマガジン」等がよく売れて、少年向けの「野球少年」というのも発行されていて私は購読していた。プロ野球のスター選手が表紙を飾っていた。九州の実業団も西鉄、八幡製鉄、門鉄、日鉄二瀬、ブリヂストン、別府星野組、大洋漁業など強豪が薙めいていた。当時まだ盛況だった炭鉱にもそれぞれ野球チームがあった。

平和台球場が出来て、翌年プロ 野球は2リーグ編成となる

それまで福岡周辺の主な野球場は春日原球場と香椎球場の2つだったが、昭和24年の終わり頃福岡に新しく「平和台球場」が出来た。こけら落としに巨人対阪神のオープン戦が行われた。私も観戦に行ったのだが、押すな押すなの大盛況で、押しつぶされそうになった。川上哲治、千葉茂、藤村富美男、土井垣武、若林忠志などの選手のプレーを間近にみて嬉しかった。

これまで1リーグだったプロ野球は、昭和25年新しく「セントラルリーグ」と「パシフィックリーグ」の2リーグに編成された。福岡をフランチャイズとして

2チームが出来た。西鉄を母体とする「西鉄クリップス」と西日本新聞を母体とする「西日本パイレーツ」であった。「西鉄ライオンズ」に一本化するの
は少し後である。

プロ野球が2リーグになりチーム数が急増したため、選手が多数必要になる。そのため全国の実業団の有力選手や大学を出たての有望選手がごっそりとプロ野球に入っていた。実業団はガタガタになった。

伝習館野球部に入って —昭和25年

前川さんはプロには行かず伝習館の監督に来てくれた。あまり若くなかったのだろう。入部した頃は部員50人ほどはいたであろうか。新米部員は専ら球拾い、レギュラーの練習の後ろでカバーをするようなことが多かった。前川さんは私を「アラキ」と呼んだ。私が「アラキじゃないです。アライです」と言うが、また次には「アラキ」と言う。そんなことが暫く続いた。

昭和25年全国選手権大会の県予選も順調に勝ち上がり、小倉豊楽園球場（今はない）での2次予選に進んだ。私はレギュラーではなかったが、小倉の叔母の家に泊まって応援に行った。当時の小倉駅は小倉の中心を流れる柴川の西にあった。現在の西小倉駅だったと思う。選手達の宿は駅の近くにあった。開会式の朝、旅館に行ってみるとな



和通浦日（左）と明大の君学高（右）と伝習館グラウンドで活躍

んだか騒々しい、慌ただしい感じがしていた。聞いてみると選手達が食中毒にかかって、下痢のひどい者が多いとのことであった。野球部長の小柳先生だったか、監督だったか、私を見て「入場式に出るのに選手が足らん。お前も出てくれ」と言われて、私も誰かのユニフォームを着て、野球場に行った。数合わせである。開会式があり入場行進があつて、私の役目は終わった。試合は当日だったか翌日だったか忘れたが八幡高校と対戦した。私はスタンドから応援をした。初回、西川投手の立ち上がりに3点を取られ、その後は抑えたものの、反撃が1点にとどまり3対1で敗れてしまった。食中毒がなくて、皆完全な体調だったらと悔やまれる試合だった。

ともあれ、当時の八幡高校は強かった。投手渡邊（法政経て八幡製鉄の投手から4番打者）、サード松永伶一（法政から住友金属を経て、法政・住金の監督、そしてロサンゼルスオリンピックの日本代表監督）、ショート森下（南海ホークス）、センター井上などの好選手を

擁していた。

25年秋新チームが編成された。そのチームのメンバーに柳城中学からの僚友高口学と共に私もレギュラーに入った。そして次の年の甲子園を目指しての猛練習が始まった。新チームになってまた監督は替わった。宝珠山さんという小肥りのずんぐりした人だった。温和な雰囲気の人だった。ノックバットでコツンとやるようなことはなかった。

昭和26年全国選手権大会県予選 と決勝戦敗退

昭和26年4月私は2年生になった。この年の全国選手権大会の福岡県の1次予選で我々は勝ち上がり2次予選に進んだ。2次予選も準々決勝、準決勝と勝ち進み、決勝戦に臨んだ。勝てば甲子園である。相手はまたも宿敵小倉高校であった。しかし、やんぬるかな決勝で敗れ、甲子園出場の悲願は果たせずに終わった。

この「DENSHU」のユニフォームはその時着ていたものであった。小倉に敗れたものの、次の年の甲子園を目指しての猛練習がまたスタートした。その一方で大学進学のこともあるので、勉強も怠るわけにはいかない。練習で疲れた体に鞭打って、勉強にも打ち込んだ。当時の野球部には練習を休むのは元日だけ、修学旅行にも野球部員は行かないとか、そんな伝統があった。

或る日私が「定期考査の時は練習を休んだらどうですか」と言ったら、上級生が「主（ぬし）だけ休んだらよかやっ

か」と言われた。「私は休みませんよ」と言って練習をやったが、試験が終わって何日かしたら、上級生達が数人練習に来ていない。聞くと、追試験を受けるので練習に来ていないとのことだった。心の中で「ほら見る」と言ったが、そんなことがあった。

秋に伝習館グラウンドで三池高校と練習試合を行なわれた。私はレフトで出場した。三池のピッチャーは板橋という県下でも屈指の速球投手であった。私はその板橋からなんとホームランを打ったのだ。打球はセンターのはるか頭上を超えていった。当時センターの後ろには軟式テニスのコートがあった。私は必死になつて走りに走った。ホームに滑り込んでセーフ。ランニングホームランであった。その日観戦に来ていた父は、私の鈍足にハラハラして、代わりに走りたくなつたと言っていた。ホームでセーフになつて胸を撫で下ろしたとか。これが私の野球部生活唯一のホームランであった。今でも好投手板橋の速球を打った時の快音とセンター頭上をいくボールを忘れない。

昭和27年3月2年生の終わり頃、野球部長の小柳親先生（あだ名「牛シヤン」）に職員室に呼ばれた。「主やー九大に行くとか、九大に行くのなら野球は辞めたらどうか、その方がよかぞ」と言われた。このころ実力考査の成績も下がり気味だし、このままでは九大は危ないと思う、というようなことだった。私は兎に角、野球は好きでやっているが、将来野球で身を立てる積もりは全くないし、

出来もしない、鈍足は如何ともし難い、強肩でもない、指は短い、野球の技倆も伸び悩んでいた。おまけに、引き揚げ者家庭の経済では私立大学には行ける訳がないし、5人兄弟の長男として浪人は出来ないうこと、父とも相談して2年の終わりで野球部を辞めることにした。

修学旅行には間に合ったが、野球部は行かないということで申し込みもしていなかった、結局行かなかった。

軟式野球部を結成し、全国大会に挑む

昭和27年4月3年生になった。野球部は辞めたものの好きな野球のことがなるとなく頭から離れない。運動場からカーンという打球の音が聞こえてくると気になる。3年生は進学のための道を全力で突き進まなければならないのに、まだふわふわしていた。

その頃、軟式野球も全国大会があることを知っていた。周りを見渡すと中学時代の野球仲間や、中学でライバルだった連中で伝習館の野球部に入らなかつたか、辞めた連中が沢山いる。軟式野球部を作ろうという機運が起こって、話はトントン拍子で進んでいって、ついに軟式野球部が結成された。顧問は英語の平出悦一先生になった。軟式野球部は出来たものの、監督はおらず、選手の頭数だけで、部費などというものは無い。ユニフォームは揃ったものはなし、それぞれが昔中学の頃着ていたものなどを、グローブ・ミットやスパイクは自前(硬式もそ

うだった)が、ボールやバットは小遣いを出し合っただけのことであった。おまけに肝心の練習をやるグラウンドがない。南校舎のグラウンドで時々キャッチボールやトスバッティングをやるという程度だった。

昭和27年度の硬式野球のチームも素晴らしいチームに仕上がってきた。主将は私の僚友サードの高口学(明治一日通浦和)、ピッチャーは柳城中の後輩安部仁孝(早稲田一日石)、セッター山下昌則(専修スズキ)を擁して再び決勝まで勝ち上がった。相手は三池高校だったが、またもや甲子園一步手前で無念の涙を呑んだのであった。2年続けての決勝敗退だった。

一方我々の軟式野球も7月に第1次予選が始まった。県を4地区に分けて我々は南筑ブロック予選であった。ユニフォームはばらばらだったがチームの結束は素晴らしく、あれよあれよと勝ち上がっていった。そして久留米の明善高校のグラウンドでの決勝戦に勝って、南筑で優勝してしまった。

2次予選は北九州の中間市で行われた。前日、中間市の宿に入ったが、とにかく暑い頃だった。宿にエアコンなどあるわけがない。2階の部屋3、4部屋ほど、襖を取り外し、蚊帳を吊ってその中にごろ寝であった。夕食の後夕涼みを兼ねてかき氷を食べに出掛けたりした。暑い上に、どこかの部屋にアベックがいると言っ、そわそわする者がいたり、なかなか眠れなかつた。朝になって球場に行っ、試合前の軽い練習をやった。相

手は硬式での宿敵である小倉高校だった。見ると揃いのユニフォームと帽子で強そうに見える。こちららばらばらのユニフォームで、いかにも寄せ集めの急造のチームに見える。見た目同様、試合はあっさり敗れてしまった。この試合を終わって軟式野球部は解散となり、私の野球部活動も終わりとなった。伝習館の軟式野球部が出来たのは、この年の3ヶ月ほどだけだったのではなからうか。促成の短命の野球部だった。

今、手元にある「DENSJU」のユニフォームは、その時70年前軟式野球の試合にも着用したものである。どうしたことで私の手元に残っていたのか分らないが、とにかく懐かしい。思い出は尽きない。

最後に

それにしても、最近伝習館野球部のことが何も聞こえてこない。「伝習館だよりの「部活動報告」を見ても、他のささやかな部活動の記事はあっても、野球部については何の記事もない。どの号にもない。朝日新聞に負けた結果が出ていても「伝習館だより」には書かれていない。我々の時代よりも立派な練習グラウンドが出来ているのである。野球部が無くなったのかと思う。どうしたことか、なんとなく寂しい。とても寂しい。少子化の時代に生徒数の減少など変化があるのだから、野球部があるのなら、せめて部活動の記事ぐらいは載せて欲しい。

伝習館創立200周年へ 羽ばたく!



進学状況

伝習館高校、昨春の進路状況です。国公立大に100名が合格し、九州大へも2桁復帰と健闘しています。

令和3年度進路実績 (令和4年4月)

国公立大学合格者 100名 (前期77、後期23)

京都大学 (1) (薬学)	山口大学 (7)	琉球大学 (1)
大阪大学 (1)	福岡教育大学 (3)	名城大学 (1)
九州大学 (11)	九州工業大学 (3)	福岡女子大学 (3)
横浜国立大学 (1)	熊本大学 (13) (薬学 1)	北九州市立大学 (1)
静岡大学 (2)	長崎大学 (10) (歯学 1)	都留文科大学 (2)
大阪教育大学 (1)	佐賀大学 (24)	福岡県立大学 (1)
岡山大学 (1)	大分大学 (1)	長崎県立大学 (1)
広島大学 (1)	宮崎大学 (3)	熊本県立大学 (3)
香川大学 (1)	鹿児島大学 (3)	

私立大学合格者 471名

慶応義塾大学 (1)	駒沢大学 (3)	近畿大学 (3)
早稲田大学 (2)	芝浦工業大学 (3)	京都産業大学 (5)
明治大学 (13)	産業医科大学医学科 (1)	西南学院大学 (45)
中央大学 (3)	同志社大学 (7)	福岡大学 (156) (薬学 9)
東京理科大学 (1)	立命館大学 (39) (薬学 1)	ほか
法政大学 (1)	関西大学 (3)	

琴奨菊関、私の 思い出アルバム

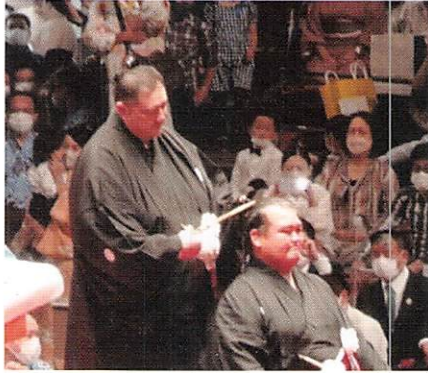
高5 下河 秀行

元琴奨菊が引退し、 親方秀ノ山襲名 披露大相撲が 盛大に開催された

郷土柳川市出身の大相撲力士元大関琴奨菊関（本名菊次一弘）が引退し、親方秀ノ山襲名披露大相撲が、東京・両国国技館で、昨年秋晴れの十月一日約五千人の観衆を集めて盛大に行われた。この一大イベントは、午前十一時のふれ太鼓から始まり、佐渡ヶ嶽部屋のトーナメント相撲、初切り、十両土俵入り、午後は相撲甚句、十両取組みと続き、面白かったのは、琴奨菊最後の一番で、息子二人との取り組みがあり、会場は本場所と違ってリラックスマードに包まれて大いに沸かせていた。



琴奨菊関の親子大相撲
長男・弘人君（5才）の寄り切りの勝ち
次男・将弘ちゃん（1才）も土俵に上がりました



最後に佐渡ヶ嶽親方が大銀杏に鉦を入れる



後援会の立花宗鑑氏が入鉦。ねぎらいの後、琴奨菊の感極まる表情が印象的だった

人気力士の断髪式は長蛇の列ができた。その後、髪結いの実演、後援会代表古賀誠元衆議院議員 自民党幹事長の挨拶、そして、いよいよ本番の「断髪式」で、地元金子柳川市長や東京支部後援会長 立花宗鑑氏など延々と百人余りに及ぶ断髪参加者があった。そして、師匠佐渡ヶ嶽親方の挨拶、横綱の網締め実演、横綱の土俵入り、幕内取り組み、弓取り式、最後は秀ノ山親方のご挨拶で締められた。

祖父が相撲好きで 土俵を造る！

ご承知の方もいらっしゃるかと思いますが、菊次一弘は、建設業経営の父菊次一典さん、母美恵子さんの三男として、昭和59年1月、福岡県柳川市佃町で生まれ、相撲好きで祖父の指導を受けて、小学校時代から相撲が大好きで、中学・高校は、高知県の相撲の名門 明德義塾に相撲留学し、平成13年12月佐渡ヶ嶽部屋に入門し、しこ名を琴奨次とした。



相撲に導いた祖父・一夫と（中1生）



小6の時にわんぱく相撲大会に出場



大関昇進を決めて口上で述べた「万理一空」を胸に

平成14年1月場所17歳で初土俵。平成16年7月場所所で十両昇進。しこ名を琴奨菊に改名した。
平成17年1月、新入幕。同3月場所所で十両優勝。平成19年11月場所9勝6敗で初の技能賞獲得。平成20年3月、関脇再昇進。平成23年9月場所所で12勝3敗の3回目の殊勲賞と4回目の技能賞を獲得。場所後の日本相撲協会理事会で大関昇進が決定した。



全国中学相撲大会で高知県優勝に貢献
右から梶原大樹（豊ノ島）、菊次一弘（琴奨菊）

日本人として10年ぶり、念願の初優勝

平成28年1月場所は14勝1敗で、ついに幕内初優勝を果たした。大相撲界入りしてから大関在位も長く、しかも日本人として10年ぶりに大相撲優勝を果たし、相撲ファンならずとも日本人を大変驚かせ、盛大な声援が送られた。

琴奨菊関の決まり手は、寄り切りが421回と最も多く、幕内在位場所数は第7位の92場所、幕内連続在位場所数は第4位の91場所、幕内出場は6位の1332回。幕内優勝1回、殊勲賞3回、技能賞4回を受賞している。金星は3回。生涯戦歴は、828勝676敗・41休、幕内戦歴は、718勝621敗41休（92場所）の成績を残している。



琴勇輝を旗手に凱旋パレード



天皇賜杯を抱く（両親、祐未夫人とともに）



私と琴奨菊関（柳川観光大使の集いで）

大相撲初優勝&結婚披露宴に招待さる

初優勝した時、私たち琴奨菊関後援会東京支部会員は、「初優勝祝賀会&結婚披露宴&32歳の誕生日」に招かれ、トリプル祝賀の宴が、ホテルニューオオタニで行われ、この「トリプル祝賀会」は、仲人の古賀誠氏や森元総理を始めとする錚々たる来賓が700人近くあり盛大な披露宴であった。現役時代の数々の活躍は、福岡県及び柳川市にとって大きな誇りである。

（柳川観光大使）



披露宴の二人



夫と柳川で優勝・結婚祝賀の水上パレード



金子柳川市長（柳川市民文化会館）に寄贈された優勝額

写真提供 山親方、柳川市

「さげもん祭り」に ごとく寄せて

高11 龍 勝

コロナ禍の中で郷里柳川の『さげもん祭り』がどのようなになっているか知りたくて、柳川在住の姪っ子（長兄の娘）に電話したら「撮りためている柳川の春バードジョン写真を送るけん、見てはいりょう」と言ってくれちゃった。素人カメラマンの腕でバシバシ撮ったものなのでお世辞にも出来の良いいものばかりでは無い、中から当会会員諸氏に喜んでもらえそうなものを私の感覚で選んで投稿しました。帰省から遠ざかっている人を中心に少しでも郷里を思い出してもらえたら幸いです。

一 中山の藤

東京近郊では亀井戸天神や足利フラワーパークセンターの藤が有名ですが、柳川にこんな大きくて立派な藤の名所があるなんて全く知りませんでした。それも



その筈で私が柳川にいたのはもう半世紀以上も前になるのですから。その上旧昭代村から旧柳川市街地を抜けて瀬高方面へ向かうなんてことは容易ではなかったし、そうでなかったとしても子供には藤の花を觀賞する興味も趣味も無かったと思います。ならば何故にこの写真を投稿したかと言うと平成二十四年の浸水水位の看板が目に入ったからです。あの時は北部九州を襲った豪雨で柳川市の矢部川堤防が決壊したとテレビの全国ニュースが伝えて、いて慌てて郷里の生家にいる長兄に電話で安否を確認したことがあったからです。つい最近だったような気がしていましたが早いものでもう十年経つてですね。

私にとっての水害と言えば昭和二十八（1953）年の筑後川の久留米より上流方面で堤防が数箇所決壊し筑紫平野が水浸しになった水害です。ちょうど成長期だった稲田が冠水し、どこが水田でどこが道路なのか、掘割なのかが判らなくなっている中を食料や衣類等の救援物資を分配して廻る消防団員や役場、自治会役員さん達の乗る小型漁船が動き回っていた光景が今でもまざまざと思い出されます。近年テレビ映像等で良く観る山間部や急峻な崖等の土砂崩れや濁流等と違って命の危険性は無かったので、まだ小学生だった子供にとっては床上浸水したとは言うものの家財やら汚物やらがゆつくりと流されて行くのを二階から見ると怖いという感じはあまりなくてむしろ面白いと言う表現に近い感じだったような記憶があります。

二 旧国鉄佐賀線筑後柳河駅

旧国鉄佐賀線筑後柳河駅（以下柳河駅）は母校伝習館への通学路からははるかに外れていたため利用したことはおろか近くへ行ったことすらありませんでした。とは言え佐賀線そのものは数回ですご利用したことがあります。長兄が佐賀大学へ佐賀線で通学していたことがあった関係で佐賀市内へショッピングを兼ねて遊びに連れて行ってもらうことができました。余談ですが当時の佐賀市は子供の私にとつては大会でした。但しその時利用してたのは東大川駅でした。柳河駅の話から脱線しますが東大川駅は佐賀線では一番遅い昭和三十一（1956）年に当初から無人駅として開業したようです。昭和三十一年と言えば大川の木工産業が最も栄えていた頃だと思えますが、その繁栄に後押しされるように出来た駅だったと思われれます。

それにしても下り終点の瀬高駅が鹿兒島本線との、下り始発の佐賀駅が長崎本線との乗り換え駅ではあったものの昇開橋を挟んで通勤・通学するよう大きな



会社や大学・高校等が点在していた訳ではない状況でどのような職種の人達が利用していたのか不思議に思うことがあります。で、本題に戻りますが写真で見ると柳河駅の所在地はなんと山門郡とあります。しかも『三橋町柳河』という地名があったそうで（現在の地図にも載っていますね）、その地名が駅名になったと書いてる資料もあります。写真は駅跡地の現在の公園、その名も現代風に『Y・u・遊の森公園』と言うそうで桜の花びらが散り落ちてる、曲がりくねった川のような所が線路跡だそうです。

三 本吉山清水寺

昭代中学校の生徒だった昭和三十（1955）年頃の遠足と言えば船小屋か『きよみつあん』と呼ばれていた清水寺でした。学校から片道15〜6キロはあったと思いますので、マイカー時代の現代ならクレーマーならずとも一般の父兄からも反対されていたでしょうが、まだ一般家庭には普及してなかった時代だから徒歩での遠足が可能だったのではないかと思います。とは言え流石に遠かったという記憶があります。現代のカーナビでルートを検索してみると柳川方面から西鉄柳川駅横の踏み切りを渡った先にある熊野神社だったような気がします。

肝心の清水寺の記憶はほとんどありませんが写真の展望台から瀬高方面の平野部分の眺望が素晴らしかったのは今でもはっきり覚えています。麦踏み（※注

1) が終わった頃の青々とした麦畑を中心に黄色の菜の花畑と当時まだ植栽されていたピンクのレンゲ畑と花ダイコンの白い花が彩りを添えて正に一幅の絵のようでした。残念ながら麦の耕作面積が減少し農業用ビニールハウスや大きな建物が増えているだろう現在はとても望めない景観ではないでしょうか。

注1 春先に麦の芽を足やローラー等で踏み、霜柱によって浮き上がった土を押し根張りを良くするために行う作業で、よく手伝いをさせられたものでした。私が現在住んでいる房総半島は麦を栽培しない稲作だけの一毛作がほとんどなので麦踏みがどうなっているか判りませんが人がつてに聞いたところでは機械式のローラーで行っているようです。



四 さげもん祭り

さげもん祭りがいつ頃から盛んになったか知りませんが一度も見たことが無かったので写真で見るとその豪華さや飾り物のデザインの斬新さや鮮やかさに驚きました。私が覚えている昭和三十(1955)年頃の旧昭代村の雛祭りは女の子

(特に長女)の健やかな成長を祈り祝う行事として各家庭ごとに行われていた行事でした。家の中で一番広い座敷や床の間付きの部屋等に三段飾りや七段飾り等を飾り、その前に手作りを含む縁起物の飾りを吊るしたいわゆる「さげもん」を所狭しと天井から吊るして近親者は室内で、近隣の一般住民は室外から見えるように開放し祝っていたものでした。観覧者には菱餅やあられ等が振る舞われたりしてました。

子供の頃は何となく見ていただけのさげもんでしたが飾り物にはそれぞれ謂われがあるということも今始めて知りました。例えばあのユーモラスな形の猿は子供を大事にするようにとか、這い人形は赤ちゃんの健やかな成長を願うものだとか…。

以後もその行事が続いていたかどうか確認しておりませんが何十年以上も前の当時の飾り物に比べれば、当然現代のそれらは比べ物にならない程進化しているのは当たり前でしょうが本当に驚きました。それもその筈でさげもんを代表する鞠は『柳川鞠』として福岡県の指定特産



民芸品にもなっているようで、これかも末永く続いて欲しいと願っています。まだ実物を目にされていない同窓会員諸氏には、郷土の誇りを是非堪能されることをお奨めいたします。



令和4年7月中旬、嘗て柳河の入り口であった国道橋(今は柳川橋といつか)から伝習館に至る旭町↓京町↓辻町四つ角を歩いた。

戦後、商店が所狭しと軒を連ね、ずらん灯に飾られた目抜き通りは、いつも買い物客で賑わっていた。ところが今日は行き交う人もなく、火の消えたような静けさである。少し足が竦んだ。

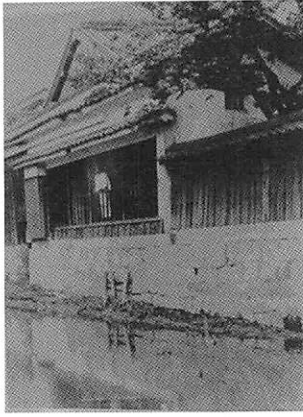
大水害のあった昭和28年前後、京町一丁目はこの商店街の中でも特に賑わった場所であろう。メガネ屋、時計屋、紙屋、鶏肉屋、仕立服屋、金物屋、化粧品店、写真館、電動機械屋、質屋、酒屋、下駄屋、洋品店、食品店、パチンコ屋、レコード屋、加えて柳川を代表する菓子(外科、内科、産科)、西鉄になる前のタクシー会社があつて便利さも際立っていた。年の瀬のごった返す買い物客は毎年の風景だった。数年後になるが銀京デパートが開店した。その場所はタクシー会社の隣でシャツ工場だったところ(赤玉の商標と廃業時の労働争議の景色を覚えている)が廃墟となっていた。そこにはシャツのボタンが無造作に捨てられていて、おもちゃの無い時代、それを拾うのが楽しいガキのころの少し危険な遊び場だった。大型商業施設が町内に出現した

昭和頃の中町の京町1丁目
目と月光荘、伝習館
高16 梶島 正司

ことで京町一丁目は一層輝きを増した。真に「銀座京町」の時代になった。銀京と通りを挟んだ高田電動機械店の店頭には街頭テレビが設置されて夜になっても多くの人が立ち見をしているのであった。

白秋が愛した「月光荘」

私は終戦の1年半後、昭和22年1月、小さな化粧品店の四男坊として同所で生まれ、全くの放任主義で育った。後に団塊の世代として括られるベビーブームの走りである。物心がついた頃の記憶は近所のお宅に上がって遊んでいること。自宅にいたことの少ない子供で、そのまま夕飯をいただくことも度々。地域が子供を育てるような大らかな時代であったのだろう。その様であったから町内のおっちゃん、おばしゃん、お爺さん、お婆さんなどから聞いた話は刻み込まれ、65年過ぎた今でも多くが鮮明に残る。当時、京町で別格のお宅は高椋家である（京町の前、町名は瀬高町であった。立花文子様の自伝「なんとかなるわよ——」に帰郷の道すがらリヤカーを借りた瀬高町の高椋写真館とあるが、その瀬高町は京町の旧町名）。



白秋が月光荘と呼んで愛した高椋家

書生さんと女中さんが掃除をしていた広い庭には木の精が宿るような大木がある。南側は幅のある掘割に面して、初夏には水辺が菖蒲の花ざかり、その向こうは水路が伸びるだけで視界を遮るものがない。その静かな一角に離れ座敷があった。北原白秋が「月光荘」と命名した由緒ある離れ座敷である。今考えてみても月見には絶好の場所だ。子供のころはそんなことは知らないから、かくれんぼやお弾きで遊んでいた。

高椋家はわが家の隣である、といっても敷地はわが家の10倍以上だ。お爺さんは高椋公夫という。白秋とは伝習館中学時代の友人である。頭がハゲていて少し怖かったのだが、気分がよいと昔話をしてくれた。孫の成和君の遊び相手をした後のことだった。お爺さんは白秋揮毫の掛け軸や短冊をたくさん持っていて、虫干しをしていた。私も同じ縁側に座ってそれを眺めていると、掛け軸を指して「読めるか」といわれた。子供に読める訳がない、行書か草書だったと思う。お爺さんはゆっくり読んでくれた。意味は分からなかったが、誉められたくて暗記し、頭のなかで何度も繰り返したのだった。60年以上前のことであるから記憶に自信はないが、このような和歌だった。

めにたちて 菊は白けど……紫のしみ
光こぼれり

※ご存じの方は完成をお願いします
そしてお爺さんは白秋さんのことを「北原はネ、北原はネ」と言いながら説明してくれるのだった。柳川の人は誰もが「白秋さん」と親しみを込めて呼ぶの

に、お爺さんが「北原」と苗字で言うのが不思議でならなかった。

お婆さんはお爺さんと違って見るからにとても優しく、上品で笑顔の印象しかない。成和君は私より5つ年下、庭で遊んでいると「おやつばんも、ここで食べめせ」と何かしら下さるものがしょっちゅうだった。成和君とはお菓子目当てに遊んでいたようなものだった。縁側に座ると、お婆さんは昔話をしてくれた。同じ話を何度もされるので、その話は忘れない。



「白秋さんはね、詩が作れず困った時、来なさったとですよ。そして、今日は百首詠むぞ」ち言うて離れに籠りなさいました。夕方頃、「出来た、出来た」と賑やかに渡って来られて、それからはお酒になり、「愉快だね、愉快だね」と手を振ってくるくる回るように踊りなさいます」この話をされる時、お婆さんも自分の手を阿波踊りのように動かしながら楽しそうだった。白秋さんもお婆さんもその時は余ほど良い時間になったのだろうと思う。（白秋の歌集「夢殿」の中に月光荘雑詠がある）

この老夫婦には一男一女があった。長男の哲夫さんは伝習館中学43回卒で往年のテニスの名選手である。お爺さんがいうには伝習館時代に全国レベルで活躍するようになり、慶応大より勧誘があったそうである。お爺さんは「哲夫は私が強くする」と言っただけを断り、強い相手

を求めての日々となったと聞かされた。昭和13年、全日本テニス選手権男子シングルス、哲夫さんは決勝まで勝ち進む。決勝の相手は過去3回優勝で、世界ランク8位の山岸二郎。この時1セットは取ったものの、残念ながら準優勝に終わるが、テニスの国別世界大会デビス杯の候補選手に選出されている。

この頃より国情は危うくなっていくのだが、日本テニスは世界的にも強い時代で、世界の一流プレイヤーとも互角に戦っている。ちなみに日本スポーツ界のオリンピック初メダルはテニスの銀である。大牟田出身で伝習館に入学していた熊谷一弥さんのシングルスとダブルスの銀が2個、転校（宮崎中学）されたので卒業生名簿にないのが残念だ。

哲夫さんは出征から帰られた後、病気で亡くなっている。その後しばらく高椋杯の冠で大会が催された。何かの時、お爺さんが「哲夫が生きたら」とこぼされたことがあったようである。

伝習館に通う道

私が伝習館に入学したのは昭和37年。最初の夏休みが終わるころ、家業の化粧品店が行き詰まりました。住居兼店舗が人手に渡り、大牟田に移り住むことになりました。京町一丁目との縁もここまでと思われました。両親の再出発は零細な水商売からでした。借家は考えられない狭さで、布団を敷くスペースもありません。電気コタツが唯一役に立ちました。通学はしていたが、月々の月謝が遅れがちになり、何より西鉄電車を降りてから

の通学路が辛くてたまりません。日に日に中途退学を考えるようになっていました。クラブ活動(卓球部)からの下校時、その日は京町一丁目を足早に歩いていたと思います。高椋さんの辺りを通るとき、道の向こう側から「寄って行かんね」の声。古賀洋品店のおばしさんが呼んでいます。

(昭和30年前後、パチンコ屋、レコード屋等をやっていた相浦さんの広いお宅が菓子屋の京月と古賀洋品店に代わりしています)

おばしさんは誰にも優しく、差別しない人です。声掛けられたことに少し驚き、戸惑いましたが、その時をきっかけに学校帰り、病弱だった長男・和人君の勉強を少しばかり見ることで毎日の夕飯を頂くようになりました。その延長で高椋家にも再び出入りするようになり、苦しい思い出の京町一丁目との縁は続いています。(おばしさんの実弟は伝習館で国語科の教師だった中村信人先生です)

古賀家も高椋家も家族と同じ扱いでした。続けるうちに中途退学の考えは消え、おぼろげながら展望が開けたような気になっていきました。

時が過ぎ、数十年を振り返ると同じものは何一つない。広い庭と月光荘の高椋さん、宝塚月組トップだった弥生さん(芸名・真木弥生Ⅱ41期)が育った高田さん、3人の医師がおられて当時の総合病院だった柳河病院、クリスマス飾りをお菓子で創ったウインドウが楽しみだった嘉月堂など多くの人と店が京町一丁目を去りました。

変わるということだけが変わらない。諸行無常、源平の昔以前から続く摂理です。しかし、形は消えるとしても語り継ぐことで何かが残るはず。少しでも伝えたいと思う。

高椋さんの月光荘は文化遺産として評価できる人がいたら、観光資源として活かしてきたはず。私は勿体なかったと考える。この先、京町通りがいかに復活するか、しないか、いずれにしても変わり続ける。伝習館につながる商店街がシャッター通りでは寂しい。

※編集部

「目にたちて 菊は白けど 置く霜の

紫の凍み 光こもれり」

白秋ー白南風より

北原白秋先輩との 出会い

高42 弥永 邦夫

高木節子先輩が東京同窓会幹事ラインにアップされた薔薇の写真と白秋の情報に「薔薇ノ木ニ……」の詩を返信したことがきっかけで会報の北島編集長より原稿依頼をいただき、私自身はそれほど白秋に詳しい訳ではありませんが、思い立って筆を執ってみることにしました。白秋の文学については専門家の方々が多数おられるのでそちらへ譲るとして、私は同郷で母校の後輩という視点から先輩について書かせていただきました。執筆にあたってゆかりの地を訪ねたり、実際

にお話を伺ったり書籍やネットで調べたりしていると、どんどん新しい発見があり白秋のイメージが変わって来た程でした。それは何かしら白秋先輩にお会いしているような楽しい時間でもありました。

私の母方の実家は沖ノ端にあり、白秋公園の目の前にあります。私自身、沖ノ端の病院で生まれ、幼少時は沖ノ端で育ち、物心ついてからも白秋生家から目と鼻の先にある叔父の営なむ魚屋をしょっちゅう手伝ったりしていましたので、白秋はとても身近な環境にありました。祖母などは「白秋さん」と呼んでいました。しかし小中学までは、柳川出身の偉人、「からたちの花」や「この道」などの作者程度に認識しかありませんでした。

白秋の詩を最初に意識したのは伝習館の校歌でした。一年時の国語の先生(昌子ちゃんと呼ばれていた)が歌詞を板書され、「素晴らしい校歌でしょう。こんな詩を書ける人は、いないわよ」と言われました。

作曲が山田耕筰なのもすごいと思いましたが、

本格的に作品に触れたのは、九大で男声合唱団(コールアカ



北原白秋生家内

デミー)に入ってからです。そこで出会ったのが作曲家で団の常任指揮者であった藤井大先生です。藤井先生はNHKの人



「水の構図」碑

形劇「新八犬伝」の音楽を全編にわたって担当され、坂本九さんのテーマ曲「夕焼けの空」も作曲された方です。東京にお住まいで忙しい中、何故か我々の指導に心血を注いでいただきました。先生は常々「音楽だけでなく、文学・美術等の文化全体に興味を持ち、実際にやらなければならぬ」と言われ、とくに北原白秋と柳川の街が好きで、学生達を引き連れては度々訪れて、西鉄柳川駅から沖ノ端まで歩きながら「どうだい、いい所だろう」と柳川の良さを説かれました。私にとっては子供の頃からよく知る道でしたが、外からの目で柳川を見るのは新鮮でした。

先生はコールアカデミーのために「北原白秋の詩による9つのカノン」*という曲を書き下ろしてくださり、定期演奏会では自ら指揮をしていただきました。そのカノンの1曲目に取り上げられた詩が「薔薇」で、今回のきっかけとなりました。短い詩なので紹介させていただきます。

薔薇ノ木ニ

薔薇ノ花サク。

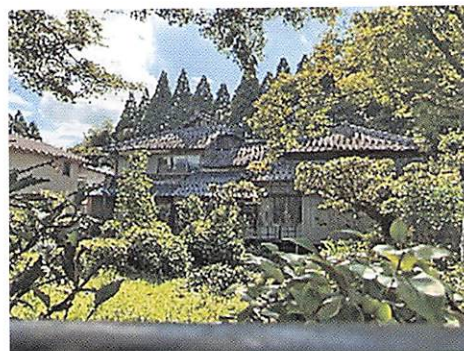
ナニゴトノ不思議ナケレド。

「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廢市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳川の街を貫通する数知れぬ溝渠（ほりわり）のほひには日に日に廢れてゆく旧い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。」

抒情小曲集『思ひ出』の序文、「わが生ひたち」の中の名文です。ここでは白秋の生ひたちについて整理してみたいと思います。

1885年1月25日に母方の南関の実家で生まれます。本名は隆吉。今回帰省の際に生まれた家旧石井家を訪れてみましたが、山の中にひっそりとたたずむお屋敷でナビがないとたどりつけない所でした。豊前街道南関御茶屋跡で90歳の解説員の方に伺った話では、お母さんのシケさんは武家の家柄で、嫁いだものの商売は手伝わず、何かあるとすぐ馬車で帰省する（駕籠説もあり）ので商家の嫁としては困った嫁であったらうということでした。ただ読書好きの祖父の影響でこの家で本に出会い、従兄の石井了介さんは東京美術学校を出た日本画家です。で芸術家の素質は石井家から来ているのかもしれない。

いよいよ母校伝習館に入學します。伝習館では文学に傾倒し、同人誌を發行したり、詩を投稿したりと文学者としての



母の郷・南関の石井家
1891年 矢留尋常小学校入学（6歳～4年間）
1895年 柳河高等小学校（城内）入学（10歳～2年間）
1897年 伝習館中学入学（12歳～7年間）

礎が築かれました。しかし文学に熱中しすぎたのか、席次は1・2番でしたが、3年進級の時に幾何の単位が取れず落第しています。そして1904年、卒業試験途中で幾何の先生と喧嘩して、親にも無断で退学してしまいます。当時の時代背景は分かりませんが、かなり破天荒な人ということはいないでしょう。

上京した白秋は早稲田大学英文科予科に入學（この時、若山牧水と知り合い生涯の友となる）しますが、すぐに文学で頭角を現したため1年も経たないうちに辞めています。「予科」というのは大学へ進む前の予備教育課程のことで、正確には早稲田大学には入っていないということになります。そうすると最終學歴は柳河高等小学校卒ということになるのですが、伝習館には落第・病欠の期間を含め最長の7年間在籍していたようです。一番多感な青春時代を過ごした学校だと思われまので「伝習館中学中退」という學歴で堂々と先輩・後輩と名乗って良

いと思います。

1908年（23歳）パンの会結成

親の反対を押し切り、家出同然で上京した白秋でしたが、やはりトンカジョン（ボンボン）ですので、お手伝いさん付きで親の仕送りを受けていたそうです。詩人として活動を始めた白秋は友人の木下空太郎らと「パンの会」というグループを結成します。この会は若い詩人や画家ら芸術家達の集まりで、当時の芸術の中心であったパリに憧れて隅田川をセーヌ川に見立て、江東区佐賀町の永代橋のたもとで開催されていきました。そういう文化の香り高く感じますが、実際には料亭で芸者を上げてのドンチャン騒ぎを繰り広げていたようです。仕送りで生活しているのに料亭で芸者という無茶苦茶ぶりで、家が破産したのは白秋のせいではないかとさえ思えてきます。

◆女性問題

白秋について語るときに必ずついてくるのが女性問題だと思えます。妻と呼ばれている3人を通して考察してみたいと思います。

一人目 松下俊子

1912年（27歳）、隣に住んでいた人妻の俊子と恋愛関係となり夫から姦通罪で訴えられ拘留されてしまいます。成り行きは、俊子から「お会いしたい」という手紙が来たので出かけて、あちこち歩き廻っているうちに電車が無くなり、宿屋に行つて飲酒したため酔いが回つて

特別な関係になってしまったという典型的なものでした。俊子は「夫から離縁された」とも言っていたようです。どちらかというと白秋の方が誘惑された方です。九州の片田舎から出てきた純朴な青年が魅力的な人妻から誘惑されたら致し方ないのではと思います。1913年保釈後、俊子と三浦三崎（城ヶ島）へ移り、翌年には小笠原へ渡りますが別離しています。一緒に住んだのは14カ月でした。

二人目 江口章子（あやこ）

1916年（31歳）に章子と知り合います。章子は大分県国東半島出身の資産家の娘でした。有名文人に憧れて上京し、平塚らいてうに身を寄せ、北原白秋を紹介されました。そしてすぐに身を任せて同居を始めました。葛飾の小岩では文人や詩人たちが訪れて有名になった「紫烟草舎」で生活します。それから文京区動坂へ転居した後、小田原に「木兎の家」を建てます。そして「赤い鳥」の創刊で生活が安定して来た白秋は、その翌年にいきなり3階建ての洋館を建ててしまいます。その地鎮祭で事件は起きました。例によって小田原や東京から芸者を集め、舞台ができ、万国旗が下がり、模擬店、楽隊まで入り200名程が集まるドンチャン騒ぎになりました。それを見た、貧しい時代を支えてきた友人や弟の鉄雄達があきれ果てて喧嘩になり、章子が非難されます。章子はそこで姿を消すのですが、なんと若い美男子の新聞記者と駆け落ちしたというのです。まさに喜劇映画でもなかなかないようなドタバタ

ぶりです。章子はそのまま家に戻ることなく別離します。4年間の生活でした。

三人目 佐藤菊子

1921年(36歳)にお見合いで菊子と結婚します。同郷の文芸評論家野田宇太郎先生の日本文学アルバムには「この結婚は苦渋に充ちた青春彷徨に終止符を打ったもので、家庭人としての白秋ははじめて生活の落ち着きを得ることとなった」と書かれています。翌年の1922年には長男隆太郎、1925年には長女の篁子さんが生まれます。夫が白秋であるだけに家族は大変だったと思います。が、亡くなるまで21年間寄り添い続けました。

野田先生は同じ著書の中で、正式に妻として迎えたのは菊子だけであって、「白秋の生涯を見渡す時、それまでの二回の同棲生活の失敗は、云わば二つの苦い恋愛体験であったと考えることも出来る」と書かれていて最初の2回は同棲と断定されています。今回取材をした北原白秋記念館の高田館長の情報によりますと、『俊子との入籍は確認できませんが、章子とは『白秋全集』(岩波書店発行)の「年譜」によると「1916(大正5)年5月、江口章子と結婚。(入籍は1918年7月28日)」と記載されています。』とのこと。白秋は3回結婚したというのが定説となっていますが、最初の二人とは若気の至りで、バツイチで再婚というところかも知れません。昔の写真等を見ると白秋は男前でおしゃれなので芸術の才能にあふれていて、女性にはもてたことだろうと思いま

す。天真爛漫で破天荒の寅さんが天才的な詩人だとしたら、というのが私の思い描く白秋の人物像です。

白秋を楽しむ

白秋は自ら「私はただ一すじに詩に仕へて来た。」と述べている通り、私生活とは違って詩に関してはその本面に真面目でストイックな人だったと思われる。そうでないと思われただけの数の詩をあれだけのクオリティーで書けるはずがありません。また、私生活のように感情のおもむくままに書かれているわけではなく、一字一句にまで細心の注意が払われています。それは同じ詩でも再版の際に細かい改作が加えられていることから見て取ることが出来ます。白秋を楽しむにはやはり詩を味わうのが一番だと思います。藤井先生は「歌は歌うべきものであり、詩は暗誦すべきものである」という持論を持たれていて私達に勧められました。そしてメンバーからの「数多い白秋の詩集の中から、何と何を持って最も効率よく白秋の作品を知ることが出来るか」というかなり無茶な質問に対しては、自ら膨大な資料を収集・分析され、ずばり岩波文庫「白秋詩抄」と「白秋抒情詩抄」の2冊、という解を示してくださいました。残念ながら現在は両方とも絶版となって



「ミズクの館」

いるようですが、便利な時代になったものでヤフオクやアマゾンなどで中古品を入手することが出来ます。

詩はハードルが高いという方は、白秋は上京後何度も転居を繰り返して、関東にはゆかりの地が多数ありますので、その地を訪ねてみるのも良いと思います。私はどちらかというとそちら派でした。

上記以降の住居地などを年表とともに記しておきます。

- 1926年 東京谷中天王寺墓畔
- 1927年 大田区馬込緑ヶ丘
- 1928年 世田谷区若林。柳河・沖ノ端へ帰郷
- 1931年 世田谷区大蔵
- 1940年 杉並区阿佐ヶ谷5-1
- 1941年 最後の帰郷
- 1942年 57歳で逝去。お墓は多磨霊園

*「北原白秋の詩による9つのカノン集」YouTubeで「九州 北原白秋」で検索すると出てきますので、ご興味ありましたら聴いてみてください。私もメンバーで歌っています。

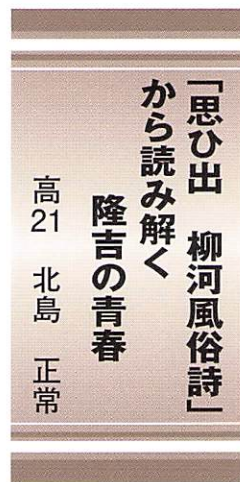
参考文献

- ・藤井凡大。「北原白秋 部分から全貌へ大局から細部への手引き」。讃歌第29号特集「北原白秋」。1991年。九州大学男声合唱団コールアカデミー
- ・野田宇太郎。「北原白秋 日本文学アルバム2」。1954年・筑摩書房
- ・北原白秋。「柳河版 思ひ出」。1967

年。御花
その他

・北原白秋記念館 展示資料、WEBサイト、高田杏子館長

※高田館長には今回の原稿の内容・事実関係についてもチェックしていただきました。



前項で弥永邦夫さんが北原白秋と合唱曲に触れたのを受けて、私は補足として白秋作詩の「思ひ出 柳河風俗詩」を紹介させてもらいます。男声合唱で弥永君も私も歌った、多田武彦作曲の「柳河風俗詩」は男声合唱の定番的な作品ですが、童謡にはないので聞かれた方は少ないでしょう(いまやyoutubeで簡単に聞けます)。私の場合、大学新入生の部活紹介でグリークラブが歌ってくれたので「それ、わが郷里の北原白秋先輩が書いた詩です」とやったら、即入部となった次第。入団早々に覚えた曲でもあります。「柳河風俗詩」には23編の詩がありますが、その中から4編に、男声合唱の名曲の数々を手掛けた多田武彦により曲がつけられ、「柳河風俗詩組曲」として演奏されています。

「私はこの『思ひ出』に依りて、故郷と幼年時代の自分とに潔く訣別しようと思ふ」(「思ひ出」わが生ひたち)と記し

たのは白秋が
この時期、生
家の没落を見
たからです。

それでも詩作
の母体となっ
た柳河への思
いは「柳河風
俗詩」の中に
込められてい
ます。北原隆
吉（白秋）の
幼年、青年代、柳河の思い出が描写され
ており、当時（明治30年代）の柳河の風
俗や街の様子が伝わってきます。

まずは1曲目「柳河」から。

◆柳河

もうし、もうし、柳河じゃ、柳河じゃ。
銅の鳥居を見やしゃんせ。欄干橋を見や
しゃんせ。

（馭者は喇叭の音をやめて 赤い夕日に
手をかざす。）

薊の生えたその家は、…その家は、
旧いむかしの遊女屋。

人も住まわぬ遊女屋。
裏のBANKOにいる人は、…

あれは隣の継娘、継娘。
水に映ったそのかげは、…そのかげは

母の形見の小手鞆を、小手鞆を、
赤い毛糸でくくるのじゃ、

涙片手にくくるのじゃ。
もうし、もうし、旅のひと、旅のひと。

あれ、あの三味を聴かしやんせ。
鴉の浮くのを見やしやんせ。



（馭者は喇叭の音をたてて、あかい夕日
の街に入る。）
夕焼、小焼、明日天気になあれ。
※BANKO 縁台

銅の鳥居、擬宝珠の欄干橋は三柱神社
への参道です。当時から柳河の象徴だっ
たようですね。

ノスカイ屋は松月文人館（左奥）の所
にあったそう。母なし児の悲哀を映し
ながら流れる川堀。柳河瀬高道を行きか
う馬車を操る馭者。旅の人に「柳河、よ
かとこばんもう」と逗留を呼び掛けてい
る。夕日に向かって立つ、馭者の姿が目
に浮かんできます。

◆紺屋のおろく

にくいあん畜生は筑前しほり、
猫を擁えて夕日の浜を
知らぬ顔して、しゃなしゃなど。

にくいあん畜生は筑前しほり、
華奢な指さき濃青に染めて、
金の指輪もちらちらと。

にくいあん畜生が薄情な眼つき、
黒の前掛、毛縷子か、セルか、
博多帯しめ、からころと。

にくいあん畜生と、擁えた猫と、
赤い入日にふとつまされて
濁に陥って死ねばよい。
ホンニ、ホンニ……

まず、白秋もこんな攻撃的なものを書

くのだという驚きがあります。この詩は
耳目が集まり「にくいあん畜生」におろ
くは何者か、実在したのかと注目されま
した。

この詩について柳川ふるさと塾長の原
達郎氏は自著「ふる里の話をしよう」の
中で、以下のように解説されています。
白秋は「思ひ出」の中の「わが生ひた
ち」で「…初恋の芽は萌えてゐた。美く
しい小さなConstant、忘れもせぬ七歳
の日の水祭に初めてその児を見てからと
いふものは私の羞耻（はにかみ）に満ち
た幼い心臓は紅玉（ルビイ）入りの小さ
な時計でも懐中に匿してゐるやうに何時
となく幽かに顛へ初めた」。このごんし
ゃんは同じ沖端の100mも離れていな
い藍玉間屋（紺屋）カネウスの山本とり
嬢。彼女は晩年、柳河新聞に名乗り出
て、「十五、六歳のころだったと思いま
すが隆吉さんからお手紙をもらいまし
た。文中に隆吉さんの私に対する厚情が
綴られていて、お気持ちには充分わか
るし、私としても密かにうれしく思ってい
ました。」。

二人は伝習館、柳河高女（伝習館卒業
者名簿に古泉「山本」トリ 高女2回
生、在りました）に通う間も、高畑公
園、散田方面への舟遊びと密かに逢瀬を
重ねた（とり談）。隆吉から結婚の話も
あったが、結局は家の事情から結婚には
至らなかつたといひます。明治35年頃の
ことで、お互い好意をもつていても恋愛
結婚など成就しがたい時代。この自由交
際を厳しく監視、邪魔だてたのが紺屋の
ヒデばんばん（とりの乳母） 紺屋の



山本とり（左）、ヒデ（右）。東京の
親族と共に撮影

おろくであると思われるのです。逢瀬の
邪魔をされた隆吉の過去への思い断ちが
たく「にくいあん畜生」は「濁にはまっ
て死ねばよい」の心境だったということ
でしょう。男声合唱で歌っている時は粹
な美人への憧憬と憎しみと捉え、おろく
 〓ヒデばんばんとは思ひもよらぬことだ
 ったので、新たな発見です。

詩集「思ひ出」を出版したのは白秋26歳
の時、未婚。上京後、数年しかたつてお
らず柳河の記憶も確かな頃でした。ヒデが
指先を濃青に染めているのは藍玉作業によ
るものか。山本とりとヒデの写つた上京
時の写真を原達郎氏から提供いただきま
した。とりの華やかさに並んで、ヒデば
んばんのクールな視線が印象的です。

◆かきつばた

柳河の
古きながれのかきつばた、
昼はONGOの手にかをり、
夜は萎れて三味線の細い吐息に泣きあか
す。
（鴉のあたまに火ん点いた、

潜んだと思ふたらちい消えた。）

※ONGO 良家の娘

掘割に咲いた、かきつばたの花。日中は華やかなれど、夜は萎れて切ない姿に。幸せな日々を送る良家の娘も、花街にわびしく住まう女も廃れた城下町に暮らす。この掘割に現れる鳩（にお、カイツブリ けえつぐり）が読み込まれています。かっこの括りは小唄か童の戯れ歌か。赤褐色の顔をした、鳩が小魚めがけて頭から潜っては別の場所からプカリと浮き上がる。灯が点滅するかのような早業の鳩の光景がユ一モラスで掘割に暮らす人を慰めます。



◆梅雨の晴れ間

廻せ、廻せ、水ぐるま、けふの午から忠信が隈どり紅いしゃっ面に足取りかろく、手もかろく狐六法踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……

廻せ、廻せ、水ぐるま、雨に濡れたる古むしろ、円天井のその屋根に、青き空透き、日の光七宝のごときらきらと、化粧部屋にも笑ふなり。

廻せ、廻せ、水ぐるま、梅雨の晴れ間の一日を、

せめて楽しく浮かれよと廻り舞台も滑るなり、水を汲み出せ、そのしたの葱の畑のたまり水

廻せ、廻せ、水ぐるま、だんだら幕の黒と赤、すししかかかてなつかしく旅の女形もさし覗く、水を汲み出せ、平土間の、田舎芝居の蕪畑。

廻せ、廻せ、水ぐるま、はやも午から忠信が紅隈どつたしゃっ面に足どりかろく、手もかろく狐六法踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……

「梅雨の晴れ間」は終曲で、多田武彦はこの曲のために柳河風俗詩を作ったのではと思わせるほどリズムカルで、乗りがいい曲です。何が書かれているのかという、芝居を早く開幕したい旅の一座が梅雨で見物席（平土間）にたまった雨水、葱畑のたまり水を水ぐるままで掻き出しにかかる光景。忠信は歌舞伎の「義経千本桜」にでてくる佐藤忠信（狐の化身）。その役者が隈取りメイクもそのままに日差しの中、狐六法を踏みながらデモンストレーション。女形役、黒と赤のんだら幕、廻り舞台も覗いて、開幕を待っている。水ぐるまの動きも速まり、軽やかで、その光景に見物人も浮かれるように楽しめます。隆吉が柳河で過ごした時代は水祭（水天宮祭）での子供芝居

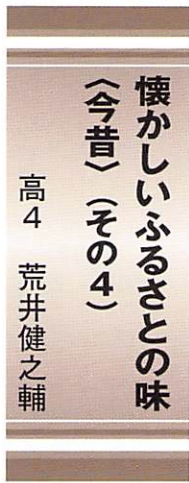
舟舞台、旅回り役者による田舎芝居と、芝居が盛んで、ひと時の娯楽として賑わったようです。隆吉と山本とりとの出会いも水祭の子供芝居でした。

多田の柳河風俗詩は2作目も作られ、新たに「思ひ出 柳河風俗詩」から「水路」「梨」「立秋」「あひびき」「散歩」「みなし児」の6曲で構成されています（個人的には「六騎」「ふるさと」も加えてほしかったが……）。

文学に夢中になった、恋もした柳河時代の隆吉。山本とりとの恋が成就していれば、国民的詩人・白秋は誕生せず、油屋（造り酒屋）の後継ぎとして終わったかもしれない。その意味において、ヒデばんばんは功労者。人の歴史は皮肉なもの。そんなことも思い起こさせてくれるのが「柳河風俗詩」なのです。

◇参考文献

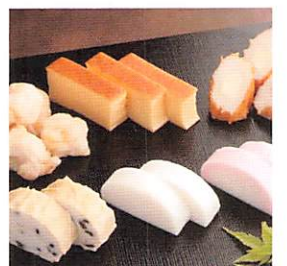
「北原白秋詩集」上・下巻 安藤元雄編（岩波書店刊）
「ふる里の話をしよう」原達郎著 柳川ふるさと塾刊



I 蒲鉾、竹輪、天ぷら

柳川の「蒲鉾」、「竹輪」、「天ぷら」は美味しかった。旭町に高棟蒲鉾店や辻町に関屋蒲鉾店などがあったが、今はない。

寂しい。竹の棒に巻かれた「竹輪」が、ぐるぐる回って焼けていくのが面白くて眺めていたことがあった。



(志岐蒲鉾HPから)

練り物を揚げたものを、福岡では「てんぷら」と言う。関東では「さつま揚げ」と言うが小麦粉が多いのか、だんごのようでも美味しくない。筑後の「竹輪」の焼きたて、「てんぷら」の揚げたては美味かった。酒の友としてはもってこいである。紀文などの大量製造に比べると格段に美味かった。

今は、隣の大川の「志岐蒲鉾」が頑張っている。ここのは美味い。大川の本吉湊さんの「本吉屋大川店（うなぎ）」に行ったついでに寄ってみた。竹輪と天ぷらを家に送って貰った。ちぎり天のようなものも美味しい。伝習館東京同窓会総会の際に「志岐」の竹輪や天ぷらが並ぶのが嬉しい。

話は別だが、山口県の仙崎あたりの蒲鉾を好む人がいるが、私はぶりんぶりんしたゴムのような「蒲鉾」はあまり好まない。四国の高知や愛媛の宇和島あたりの「蒲鉾」は美味い。

そして「じゃこ天」はとりわけ美味しい。揚げたては格別である。四国でも揚げ物は「てんぷら」と言う。新橋にある香川と愛媛のアンテナショップ「かおりひめ」に立ち寄ると愛媛の「じゃこ天」を必ず買う。酒の友にもってこいである。

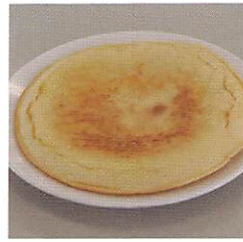
る。「かまぼこ」や「じゃこちくわ」というのもある。

揚げ物では「さつまあげ」が代表的なものだが、とても美味しそうに見える。食べてみると少し甘い。鹿児島では「さつま揚げ」とは言わない。「つけあげ」である。私は四国の「じゃこ天」に軍配をあげる、それも高く上げる。

Ⅱ「粉もの」

1) 「ふなやき」

昔は子供たちのおやつを普段家にお買い揃えて置くようなことはなかったと思う。常時「せんべい」や「くろぼう」が缶



に入れて置いてあることはまずなかった。時には「からいも」を蒸かしてぎるに入れておくというようなことはあった。とにかく子どもは腹が減る。

そこで「ふなやき」を作る。小麦粉をやや薄めに練って、砂糖があれば入れて、さらに重曹を溶いて練り込んで、油をひいたフライパンに伸ばして焼く。砂糖のない時は人工甘味料のサッカリンとかズルチンを溶かして、練り込んで作る。黒砂糖があれば言うことはない。2つ折りにしては喜んで食べる。少しでも甘いものが欲しい年頃だった。

朝日新聞の「天声人語」(2019年6月27日)に次のような文があった。

『茶人の千利休は、客人のもてなしに小麦粉を薄く焼いた菓子を出すことがあった。文献には「フノヤキ」とある。漢字で麩焼。鉄板で粉ものを焼く食文化の源流の一つになった。もちっとした食感に「なんですのん」と客が感激する。その様子を利休は楽しんだのでは』とある。これはまさに我々が「ふなやき」ではないだろうか。「フノヤキ」は柳川に生きていたのである。「ふなやき」は由緒正しき伝統茶菓子なのであった。「えへん！」

2) 「うどん」

遠いあの頃、「うどん」は「うどん屋」で食べるものとは思っていなかった。自分の家で作るものだった。「うどん屋」の記憶はない。我が家では丸い麺台と麺棒が台所にあった。「うどん」づくりは時々手伝った。小麦粉を水で練る、捏ねて伸ばす、畳んで切る、茹でる。更に、いりこ醤油で採っただし汁を入れるといった具合であった。茹でた麺を水洗いなどしなかったもので、とろみがついて冷たくなったら食べる気がしなかった。山梨の「ほうとう」や群馬の「おつきりこみ」に似ているのではなからうか。甲府に行った折に、昼に「ほうとう」を食べた。家内はとても美味しいと言った。私は柳川の「うどん」を思い出した。博多のうどんはこしがない。私は讃岐うどんに軍配をあげる。美味しい方が良い。

3) 「だご汁」

これは「うどん」の「だご」版である。「すいとん」と言う地方もあって、

それが一般的らしいが、我々は「だご汁」だった。「うどん」と同じやり方で練って。捏ねたものを、今度は手で平たく伸ばして、適当な大きさに手で千切って鍋



に入れていく。そして茹でる。千切るのを我々は「つん切る」と言ったので、これは「つんきつだご」である。代用食としてしばしば昼食に出された。

最近テレビなどで「すいとん」が出てくると、「おいしいじゃないの」とか言っている、ここにこして食べているが、だしのレベルも低い「だご汁」を、ご飯の代わりに毎日でも食べてもらいたいとなる。食事だから仕方がないが、うんざりする。

4) 「ごんだんぎり」

これは、「うどん」と似たプロセスでつくるが、「うどん」のように紐状に切るのではなく、花札かやや大きめに四角に切って、茹でたと思っている。そして甘い小豆餡をまぶして食べた。これは代用食ではなくて、おほぎか牡丹餅を作る感覚だったのでなからうか。たまにかお目にかからないご馳走だった。

皿味噌・醤油

柳川には味噌・醤油の醸造元が何軒もあった。三橋町の江曲あたりに集中して

あったように思う。我々は普段江曲のあたりを長命寺原(ちようめじばる)と言っていた。長命寺という寺があるのだ。近くに「ニビシ醤油」や「石橋味噌屋」そしてほかにまだあった。しかし現在元気にやっているのは「並倉本舗」だけらしい。昔は「鶴味噌」といったのではなからうか。私たちは「吉開味噌屋」と言っていた。柳川の写真に赤煉瓦の倉がよく出てくるが、そこである。三橋町といっても横の壇平橋を渡ればそこは城内で柳川なのである。我が家から近かったし一人娘の吉開光子さんが中学・高校で同期であったので、よく知っていた。昔はすぐ南に「石橋味噌屋」があった、その主人が私の叔父と伝習館で同級だったということ、味噌買いはいつも石橋さんに行かされた。しかしいつの間にか味噌屋は廃業された。

吉開さんの味噌は本来甘めの白味噌である。白系の麦や米の味噌である。柳川を離れてからは時折送っていただいた。帰郷のたびに祖母が作ってくれた豆腐の味噌汁はこの味だったなと思いつつながら食べた。懐かしい味だった。美人だった光子さんもういぶん前に亡くなった。「並倉本舗」も現在は多角化路線で頑張っている。今一度あの甘めの白味噌の味噌汁をいただいで祖母を偲びたい。

Ⅳ「懐かしいおいしい店」(今も元気な店、消えた店)

1) 「うなぎの名店」

「本吉屋(本店)」は説明するまでもな

い老舗である。「沖の端支店」は昔の沖の端郵便局の跡にある。「お花」の蔵の壁が見える好立地にある。「本吉屋大川店」は弟の湊さんがやっている。昔の柳城中学の野球部仲間であって、伝習館同窓会の世話役でもある。たまに訪れると「帰つとりめしたかんも」とニコニコして現われる。柳川弁の達人である。

「若松屋」も老舗である。こども姓は本吉さんだったのではなかるうか。何度か訪れた。

昔は、三柱神社の欄干橋の前に「旭屋」、また恵美須町に「菊水」という「うなぎめし」を出す料理屋があった。今は「うなぎめし」を出す店は多いらしいが私は殆ど知らない。

「萬栄堂」という店が出来ている。6年前、柳川に帰った折に「かんぼの宿」に泊まった。夜になって久しぶりに「うなぎめし」をと思い立って出かけた。「お花」を抜けて「本吉屋」の支店に行ってみるが閉まっている。さらに「若松屋」に行ってみるが暗くひっそりとしていた。仕方なく「お花」の前まで戻って来た。夕方、タクシーが3台客待ちをしてい



(本吉屋本店HPより)

にチャンポ
ンも美味し
い。父もよ
くここ「た
つみや」で
チキンライ
スを食べて
いたらし
い。私も柳
川に帰ると



よく訪れる馴染みの店である。

3) 「レストラン坂田屋」

昔、京町の北原病院のすこし東に「坂田屋」という小さなレストランがあった。私が大学に入った頃、母が「ケンちゃん、あんたも大学に入ったら洋食の店でご飯を食べることもあるやろから、ナイフとフォークの使い方ぐらい知つた方がヨカよ」と金を呉れて、妹や弟を連れて「坂田屋」に行つて来いと言つた。それまでナイフやフォークで食事をしたことはなかった。それで「坂田屋」に行つてハンバーグやエビフライなどのランチを食べた。皆でナイフとフォークをカチャカチャいわせて食べた。初めて食べるランチはとても美味しかった。母の心遣いが嬉しかった。未だに忘れない思い出の食事である。その母はその後7年ほどして、51歳の若さで早く逝つてしまった。「レストラン坂田屋」もとうの昔に消えた。

4) 「亜州飯店」

中華料理の店である。これも京町の「坂田屋」の並びにあった。

叔父(母の弟)が時々我が家に来て来た。叔父は母の実家の仕事をしていて、母の20歳年下で、私の4歳年上なので、私は兄弟感覚だった。家に来ると母が「時治さん、亜州飯店ば奢ってくれんね」と言う。叔父はあっさり「よかよ」と言つて「亜州飯店」の出前を注文してくれた。そのころ柳川には中華料理の店は他になかったのではなかるうか。父も

母も引揚げの前は中国山東省の青島にいて、本場の中華料理の味を知っていたので、中華料理は好きだった。私も父に連れられて青島の下町の中華料理を何度か食べたが、ナマコの入った「八宝菜」や「水餃子」が特に美味しかったように記憶している。

「亜州飯店」の「八宝菜」もナマコが入つていて美味しかった。その「亜州飯店」もいつの間にかなくなった。随分昔のことである。叔父もとうに若くして故人となった。

5) 「梅蘭芳」(メイランファン)

「ラーメン」の店である。伝習館に通つている頃にはまだ「ラーメン」など食べたことはなかった。麺といえは「うどん」しか食べたことはなかった。「そば」もずっと後である。「ラーメン」を食べたのは大学に入ってからだと思つた。伝習館の北校舎の裁判所寄りに1軒の「ラーメン屋」が出来た。「梅蘭芳」というのれんがかかっていた。中国の有名な京劇の俳優の名前なので、すぐ覚えた。ここに弟たちを連れて食べに出かけた。

「豚骨ラーメン」で美味しかった。その後柳川でもあちこちに「ラーメン」の店が出来たようだった。その後「梅蘭芳」ののれんも消えた。これも遠い昔のことである。

※懐かしいふるさとの味シリーズは今回をもって終了です。

ご愛読ありがとうございました。

50代になつての東京 と同窓会への想い

高41 下河 敏彦

多くの人が華やかな暮らしを夢みて、人生を賭け、水平線を昇る太陽の中を突き抜けるような挑戦や出会い、あるいは夕暮れ時のような寂しさも味わったことを語り明かした第69回大同窓会盛會、その直後のコロナ禍。故郷を遠く離れているからこそその思い、そして「青春は密」という名言も飛び出した昨年の夏。相変わらず時代に翻弄されるなか、家族や仕事仲間とも違う、同級生の意味について、またまた色々と考えてみました。

■東京の大きさと孤独

1994（平成6）年、就職活動で初めて上京しました。大学のある大阪からの新幹線を十分な持ち合わせがなかったのが、夜行バスで東京駅八重洲口に来たのが最初です。早朝6時頃に到着して午後3時に面接を終え、午後10時頃の帰りのバスまで時間が有り余っていました。

その時に時間つぶしに寄った書店が八重洲ブックセンターでした。8階建てのビルすべてが書店というスケールには圧倒されました。大きな本屋さんと言えば福岡天神の紀伊国屋書店に行ったことありましたが、基本的には伝習館横の「昭和堂」が私にとつての書店の基本スケールでした。立ち読みしている最中に「おうっ、シモガワ」と声をかけられる



初上京のとき時間をつぶした八重洲ブックセンター



2019年1月3日午前様の飲み会



東京で故郷を感じさせる「有薫酒蔵」の寄せ書きノート



松山空港からの帰路に撮影した夜景



2022年6月18日。41回生の飲み会

ような…。ちょうど就職氷河期が始まった時期でもありましたし、今ほど防災や環境保全の機運も高くないので同業者人口は少ない、書店で声をかける人、ましてや高校の同級生などいないのではないかと思っていました。だから、基本的に孤独を受け止めて生きていかなきゃいかんと思っていました。

■故郷の友

一人で東京にできて「シモガワ君ってさあ、九州の人だよな。ナントカDESTAYとか言ってるのオ」と同期のオトコに「東京弁」でいわれると、冷めた対応をして、ああやっぱり孤独なんだという思いが強くなっていきました。1995（平成7）年のことですが、それが間違いであることに、2019（令和元）年までかかってしまいました。

私たちは2019（令和元）年の第69回大同窓会総会の幹事学年だったので、2019年1月2日総決起大同窓会を開きました。そのときに、いわゆるリストラヤバブル崩壊でサバイバルレースを強

いられもう疲れたという人、青春に掲げた理想が遠くなったという人が結構いました。それでも会いたかったといってくる人、お互い変わってないねと笑顔になれる人、暗れがましい人生じゃなくても、しがらみのない同級生は貴重なんだと言ってくれる人、おかげでとても楽しい時間を過ごすとともに、自分の辞書から「卑屈」という文字が消えていくような爽快感がありました。

そして日付をまたいだ3次会、楽しく飲んでいたのですが実は東京に同級生おらんとやろうなあ…と一抹の不安を残していた中、都内にすんでいて海外の土産話をしている大男が真後ろにいました。学年幹事をしている古賀貴統君でした。そしたら東京周辺に同級生は30〜40人（約1割）おるやろうというのです。実際、2019年5月26日にホテルグランドパレスで開かれた東京同窓会親睦会には、41回生は28人集まりましたので、これなかつた人も合わせるとそれくらいの人数にはなるのでしょうか。そして、同じクラスになったことのない初めて会う同級生

も、まるで昨日まで飲んでいたかのように親しく接してくれるのでした。その後、新橋にある「有薫酒蔵」名物の寄せ書きノートに想いをつづつたりしています（ちなみにこの寄せ書きノートの有薫酒蔵は新橋にあります、久留米大学附設高等学校、修猷館高等学校について伝習館は3番目であり、現在全国の高校に広まり3358校に達しています）。

■窓から見える景色の変化

先ほど述べた八重洲ブックセンターが再開発に伴い営業を終了するというお知らせがありました。超高層大規模複合ビル（2028年度建物竣工予定）への将来的な出店を計画しているようなので、書店が完全になくなるわけではなさそうですが、東京の大きさを感ぜさせてくれた書店でした。そして、同級生再会の場となったホテルグランドパレスも時代に翻弄される結果となつてしまいました。心の空白を埋めようと、この会報の文章を考えてのいでいます。

いまは防災の仕事が忙しく、仕事終わ

りのベルが鳴っても山のような仕事を抱え込むことが多いです。また、出張に伴って飛行機や新幹線、高速道路を使って川崎に帰ることも多くなっています。

同窓会でみんなに再会する前は、窓の外を眺める余裕はあまりなく、ただ疲れて眠るだけでした。でもいまは東京が近づいたが、あいつ相変わらず飲んだくれてるのかな、かわいい娘さんたちと団らんしてるんだろな、ソフトバンクホークスを応援しよるのかな…などと、故郷を愛しながら決意をもって東京に出てきている友に想いを馳せると、なかなか楽しい気分になります。

■200周年に向けて

2022（令和4）年10月には、前年できなかつた大同窓会が開催されました。会場も御花から新しい柳川市民文化センターに変わり、心機一転と言ったところでしょうか。そして、今年の伝習館高校200年に向けた礎になる年です。41回生もようやく心理的にコロナが明けてきて、いつもの団結を取り戻しています。

ここ3年、コロナ禍による様々な制限がありました。青春を共にした絆や、そこから始まる友情は広く永くつながって行くものです。変わるものもあるし、変わらないものもあります。閉塞感のある日常は打ち砕き、伝習館魂という守るべき誇りを、力を入れすぎず笑顔でつないでいくことに、私たちも協力したいと思います。

いつの時代も情熱を失わず少年心を持つていたいものです。

詩 手紙

高14 井上 晴美

貴女と私の そうね、あの頃：

あなたは六つ、私は八つ

東に清水山 南に雲仙を望み

矢部川支流の二ッ河育ち

春の土手、川風受けて

野いちご、ぐみの実、つくしんぼ

麦束つかんで草スキー

クローバー、れんげの首飾り

川はさらさら めだかにしじみ貝

ゆつくりと春の一日暮れてゆく

夏来れば、やさしく包むは麻の蚊帳

濃ゆく あわく 幼な心のあなたと私

ほのぼの ほろほろ 思い出す

夢の中

トロン、トローン

外は暑いよ 夏休み

六つの年の初休み

高いお屋根のお御堂は

寺の要の造りなり

夏のテッペン、昼下がり

やりかけ宿題 ひと休み

そろそろトロンと、ひとよこい

御堂をスイスイ風わたる

楠の香のせてスーイスイ

夏のテッペン、昼下がり
やりかけ宿題、あとでまた
ウトウトコックリ、夢の中
しばらく、しばらく、夢の中



俳句・五七五

（絵手紙も井上晴美さん）

冬

年あらた 小寒七草 矢のごとし

冬の菜 ふつくらコロコロ 芋づくし

春

春の川 大蛇となりて 海に這う

春かすみ 南に雲仙 泰然と

笑みかわす 五月の幸は ありがたし

夏

田には水 畦道小道を 思い出す

朝摘みの 豆いろいろと 匂い立つ

鉄線花 青く絡みて 青く咲き

八月は 逝き人思う さるすべり

秋

離れ家の 茂吉を偲ぶ 柿日和

ぬるぬると 古湯に浸かる 秋の暮れ

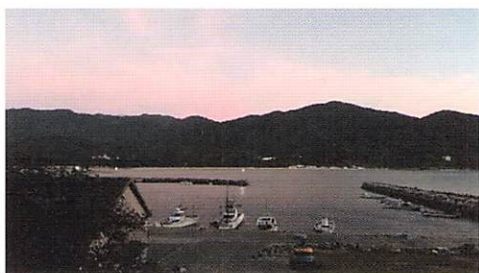
嵐去り 雲間の月は まろやかに

俳句 二首

高13 原田万紗子

やうやうに 涼風渡る 夕間暮れ

秋入り日 水面を走る 金の道



賛助金のお振込方法

① 同封の郵便振替用紙で送る

② 銀行振り込みで送る場合

三井住友銀行（銀行コード0009） 鶴見支店（店番号572）

普通預金 口座番号7329411 口座名＝伝習館東京同窓会

いずれの振り込みの場合にも○回生、または卒業年度をお書きください。通信欄には近況、会報へのコメントもどうぞ。

◆賛助金のお願い

伝習館東京同窓会は会費制をとらず、会員の皆様の篤志である賛助金により成り立っています。東京同窓会に集まる賛助金は東京同窓会会報の発行、会員への通信、総会・親睦会・交流会の開催などの経費に使用されており、皆様からいただく賛助金が東京同窓会の運営を支えています。1口2000円から何口でも結構です（半口1000円でも受け付けています）。同封の郵便振替用紙にて送付いただき（付いてない場合は送り先、別記）、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



事務局は以下の通り。
〒230・0073
伝習館東京同窓会事務局

横浜市鶴見区獅子ヶ谷1・9・1白谷方
☎045・581・8193（兼FAX）

広告募集

チラシ広告

対象Ⅱ東京同窓会会員向けに製品・商品・営業内容などをPR、販売したい方。

○チラシ二千部を作成し（フォーム自由）事務局宛送付下さい。会員への会報送付時に同封郵送します。

○広告代金Ⅱ一件につき5万円を賛助金として頂きます。別途に名刺広告も募集します。

会員の皆様からも、希望業者の方をどしどしご紹介下さい。

募集中！

1. 表紙絵・表紙用写真
2. 原稿Ⅰ伝習館OBならダッデンヨカバンモ

○テーマ自由（同窓会報にふさわしいもの。審査あり）
随筆・詩・短歌・俳句・川柳、絵画・写真・書など

○字数制限なし・原則※常識的範囲で（原稿用紙使用、またはワード原稿をメールで送付）
写真・絵・カット添付可

○表題・投稿者氏名・卒業回か卒業年度を書いて下さい。

※原則10月20日〆切（早め歓迎）

―原稿送付先―

〒153・0051

目黒区上目黒3・21・19

伝習館東京同窓会会報局 北島 正常 行

E・mail・anc54684@nifty.com

携帯 090・5532・0323

Facebook = 伝習館東京同窓会

編集後記

○オミクロン型蔓延の第7波も小康状態から新段階へ。人の流れや動きも加速しつつあります。10月、柳川では大同窓会がフル開催されました。5月28日には5年ぶり、久々の東京同窓会総会が予定されています。無事開催に漕ぎつけられるといいですね。

さて東京（首都圏）の同窓生をつなぐ同窓会会報もご協力を得て第23号が出せました。会報については年代ごとに温度差があることは確かで、今の冊子仕様がいいという人、一方では紙媒体に頼らずSNS化をという声もあります。いま東京同窓会の経費は配送・印刷代が大半を占め、今後が懸念されます。新聞発行も減少、週刊誌も文春以外は激減しており、紙媒体はご年輩に支えられている状況です。今後のことを考えれば、同窓会の呼びかけ、活動報告はスマホ・パソコンで流し、会報も電子化しホームページで見てもらう方法かなと思います。今、編集委の間で会報の今後について話し合っております（併用案も出ているがコストは掛かる）。次号24号は出す（毎回会長の指示確認あり）方向でおりますので、今まで同様、投稿はお願いいたします。（北島）

○過去の22号までが見られる「Facebook」伝習館東京同窓会会員限定共有情報」を設けました。現在、グループ会員のみの限定ですが、以下のアドレスに承認申請すれば、グループに入れます。（池上） [denshitekyo-jinnu@googlegroups.com](https://www.facebook.com/denshitekyo-jinnu@googlegroups.com)

○編集委員は以下の通りです。

北島正常（編集長、高21）

内山秀生（高10）

永倉（跡部）素子（高10）

高栗和人（高20）

西原正道（高21）

池上英次（高35）

下河敏彦（高41）

白谷政則（高21）

副会長 梶島正司（16）

会長 原田 万紗子（13）

発行責任者 白谷政則

伝美ギャラリー&トピックス

高木節子さん (高14回)
撮影

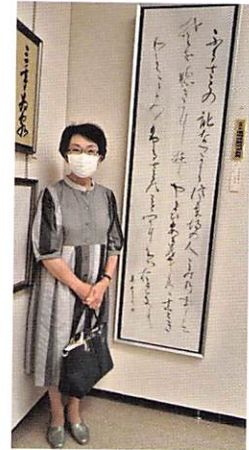


ツインの揚羽



ヒメアカタテハ

作品の前で師村華香さん
(高21回 大津留尚子さん)
ふるさとの訛なつかし停車場の
人ごみの中にそれを聴きにゆく
やまひある獣のごときわがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし
石川啄木「一握の砂」から2首



師村さん 福岡県美術展覧会において
県美術協会賞(会員の部)を受賞

ミスタージャパンで佐藤公治さん、大健闘! 4位入賞



Mr.JAPAN (Miss JAPANの男性版コンテスト)の全日本大会が9月に東京で行われ、当同窓会の佐藤公治さん(高63回)が最終審査に進出、4位入賞を果たした(応募総数900人)。

佐藤さんは学生時代の内気な性格を克服したい、挑戦することの爽快さを多くの人に伝えたいとの思いから、本大会にエントリー。会社業務

の傍ら、選考の約7カ月の期間で、早朝ジムでの筋トレ、その様子を動画撮影編集(福岡県代表なので故郷大川市のPRも)、スピーチ練習、ウォーキングポージング練習等に励んできた。SNSで自身が発信した際に「筋トレ報告がモチベーションになった」「私も低身長会社員ですがとても励まされました」といったコメントを多数もらい、本人が励まされ、自信もついたという。「今回入賞できたのは沢山の方々のサポートのお蔭で気持ちを切らさず準備できたことが大きい。今後感謝を忘れず、日々挑戦していきます」。チャレンジはまだ続く。



みやま市に文化・芸術・スポーツ・健康・子育て支援の機能を備えた地域の交流施設「みやま市総合市民センター=MIYAMAX」(みやま市瀬高町下庄)が誕生しました。同センターには800人収容の演劇・コンサート会場が設けられ、9月25日には開館記念式典が執り行われました。この特別記念公演として注目されたのが、瀬高出生の人間国宝、杵屋勝国さんと一門による長唄三味線の演奏。「三味の響き」を皮切りに、義経をテーマにした長唄三味線による「鞍馬山」「五条橋」「勧進帳」が披露されました。途中、葛西聖司(古典芸能解説者)さんとの対談では「親の勧めで、6歳の時にバイオリンも三味線も習い始めたが、遠くに通うバイオリンより、隣家に師匠がいた三味線が長く続けられた。皆さんにも古典芸能を継承してもらいたい。聴いて興味もたれたら、ぜひやってください」とエールを送りました。



みやま市市民センターが落成
杵屋勝国さん記念公演



第8回 東京同窓会コンペ

5月25日
千葉国際カントリークラブ桜中→東
天気・晴れ10名

優勝=甲斐田幸輝さん
(高32回)



幹事・甲斐田さん
文句なしの優勝



第9回 東京同窓会コンペ

11月7日 大厚木カントリークラブ本コース
天気=晴れ・11名

優勝=江崎浩輔さん(高37回)

例年雨に弱いこの時期のコンペですが、今回は持ちました。初参加の指田初代さん(高36回)をはじめ、女性3人が参加し、コンペを盛り上げてくれました。

江崎浩輔さんが終始安定感のあるゴルフ(47・49 ネット75.6)を見せ、2回目の優勝を遂げました。



令和5年度も年2~3回のコンペを予定しています。東京同窓会の参加ご希望の方は山田雅彦(高40回)までショートメッセージをお願いします。
Tel.090・5524・7028



杵島同好会会長の右が、優勝杯を手にした江崎さん、2位の指田さん

東京同窓会ゴルフ同好会の報告



「秋入り日 水面を走る 金の道」 (高 13 原田万紗子さん撮影)



facebook = 伝習館東京同窓会
伝習館東京同窓会事務局

〒230-0073 横浜市鶴見区獅子ヶ谷 1-9-1 白谷方
TEL 045(581)8193 FAX 兼用